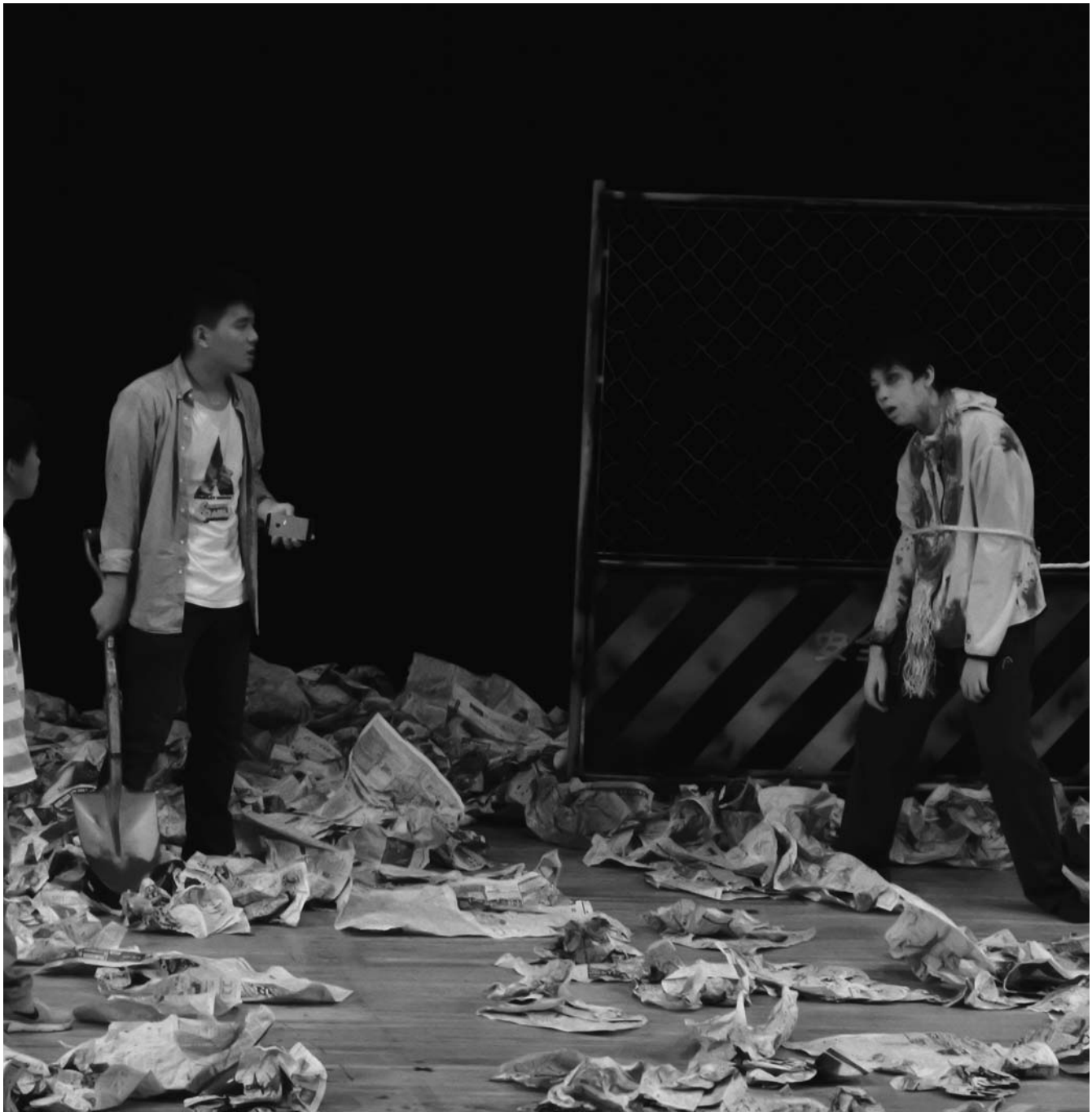
演劇創造

復　刊
第141号
（第54巻 第2号）
令和元年(2019年) 11月15日発行



―― 発行 全国高等学校演劇協議会 ――
〒732-0068 広島県広島市東区牛田新町1丁目1－1 広島市立広島商業高等学校 TEL 082－228－2481 FAX 082－222－0869
事務局長 黒 瀬 貴 之
ホームページ http://koenkyo.org/　　メール info@koenkyo.org

第65回大会審査の経過

第65回全国高等学校演劇大会は、太古よりの歴史を伝える佐賀県の東端、九州の交通の要衝・鳥栖市の「鳥栖市民文化会館」で、７月27日（土）～29日（月）の日程で行われました。

今大会の専門審査員は、オペラ、ミュージカル等においてさまざまな舞台美術を手がけ、優れた作品に高い評価を受けている舞台美術家（セノグラファー）の堀尾幸男先生、朝日新聞の文化分野において記事、批評を掲載するとともに多くの社外メディアへの寄稿も多い評論家の山口宏子先生、東京演劇集団風の俳優・演出家として活躍するとともに全国の学校、地域活動で積極的に演劇活動を展開している西垣耕造先生、演劇企画集団「THE・ガジラ」を主宰、数多くの作品を発表し活躍の目覚しい劇作家・演出家の鐘下辰男先生の４名にご担当いただきました。

また、顧問審査員として北海道ブロックから五十嵐英実先生、関東ブロックから小池豊先生、近畿ブロックから谷口克朗先生と、演劇部顧問として全国大会に出場する他、地元でも演劇活動に携わっている３名の先生にお願いいたしました。

３日目の上演終了後の審査会では、まず優秀以上の４校を決める投票を行い、その結果屋久島と逗子開成が満票の７票、帯広北とふたば未来学園が４票となりました。また、他に４校が票を獲得しており、まず、優秀校の確定に向けた審査を行いました。それぞれに票の入った各校について、意見を出し合いましたが、結果として票数通りにということでまとまりました。続けて最優秀校の決定に向けて協議しました。

屋久島「ジョン・デンバーへの手紙」は、自分たちの住んでいる場所のあり方を未来に向けて考えていこうとする視点、自己表現だけでなく大事なことを感じさせる演技、それらを支える脚本がかみ合った優れた作品であることが高く評価されました。

帯広北「放課後談話」は、緩やかな舞台進行の中に純朴さを感じさせるとともに、演劇部に入ることをめぐって少しずつ会話を重ねていく情景が、観客に、自分の中で想像できる大事なことを投げかけてくれる作品としてのよさが評価されました。

ふたば未来学園「Indrah～カズコになろうよ～」は、34名で構成される舞台の中で、揺れる青春群像がコラージュ的に描かれている点、一人ひとりの発することばが生のことばとして聞こえてくるせりふ、発声の確かさ等が評価されました。

逗子開成「ケチャップ・オブ・ザ・デッド」は、空間づくり等表現に対する意識が高く感じられ演劇的要素が優れている点、自分の存在の不確かさを描く骨格がしっかりした脚本、役者の演技の確かさ等が高く評価されました。

その上で、演技力の確かさ、創造性、観客への訴求性、演劇としての新しい試みを感じさせること等を総合的に判断し、逗子開成を最優秀としました。

創作脚本賞については、その地に住んでいるからこそ伝えることのできる内容をしっかりと描いている点が評価された屋久島「ジョン・デンバーへの手紙」の作者である上田美和さんに授与されました。

舞台美術賞には、視覚的に優れた舞台を、手間をかけて作りあげた点が高く評価された長良に、また内木文英賞には、生徒創作の作品を自分たちの手で作り上げ、成果を上げた点が他の高校の模範となる点を高く評価し、小山城南にそれぞれ授与されました。

演劇大学連盟賞については、逗子開成が受賞いたしましたが、副賞の講習会については、地区（ブロック）

の次年度以降の演劇活動につなげていただきたいと思います。

今大会においては、性をめぐる問題、東日本大震災以後続く現実と向き合う姿を描いた作品、海外作品をそれぞれの視点から構築した作品等、多彩な舞台があり、見ごたえのある大会でした。役者自身の中で腑に落ちていくことば、多面的な要素を絡め合わせて作り上げていく空間世界を、舞台に立つ人間の身体を通して発信し、観る側がそれに共振していくことこそが演劇のもつ「楽しさ」です。観ていた皆さんがひとつでも多くのことについて自身の問題としてとらえていただければ、演劇をめぐる世界が広がっていくことと思います。

（事務局　三上　実）

【最優秀賞（文部科学大臣賞・全国高等学校演劇協議会会長賞・東京演劇大学連盟賞）】

逗子開成高等学校
飛塚　周・逗子開成高校演劇部／作
『ケチャップ・オブ・ザ・デッド』

【優秀賞（文化庁長官賞・全国高等学校演劇協議会会長賞）】
（上演順）

鹿児島県立屋久島高等学校
上田美和／作『ジョン・デンバーへの手紙』
帯広北高等学校
加藤真紀子／作『放課後談話』
福島県立ふたば未来学園高等学校
ふたば未来学園高校演劇部　齋藤夏菜子／作
『Indrah ～カズコになろうよ～』

【優良賞（全国高等学校演劇協議会会長賞）】（上演順）

栃木県立小山城南高等学校
黒瀬香乃／作『無空の望』
大谷高等学校（大阪）
森野　和／作　髙杉　学／補作『ふじんど』
島根県立横田高等学校
伊藤靖之／作『雨はワタシの背中を押す』
佐賀県立佐賀東高等学校
いやどみ☆こ～せい・佐賀東高校演劇部／作
『君がはじめて泣いた日も、世界は普通の顔をした。』
埼玉県立新座柳瀬高等学校
オスカー・ワイルド／原作、稲葉智己／翻案『Ernest!?』
岐阜県立長良高等学校
オスカー・ワイルド／原作 長良高校演劇部／翻案
『My Name！ ～The importance of Being Earnest～』
日本大学鶴ヶ丘高等学校
むらやまだいすけ／作『屋上の話』
香川県立丸亀高等学校
豊嶋了子と丸高演劇部／作『馬鹿も休み休みYEAH!!』

【舞台美術賞】岐阜県立長良高等学校
『My Name！ ～The importance of Being Earnest～』

【創作脚本賞】上田美和『ジョン・デンバーへの手紙』

【内木文英賞】栃木県立小山城南高等学校

第65回　全国高等学校演劇大会　審査集計用紙

日付	番号	ブロック	学校名	演目名	作者名	堀尾	山口	西垣	鐘下	五十嵐	小池	谷口	計	賞
7月27日(土)	1	関東	栃木県立小山城南高等学校	「無空の望」	黒瀬　香乃／作		○						1	優良
	2	近畿	大谷高等学校（大阪）	「ふじんど」	森野　和／作 高杉　学／補作	○							1	優良
	3	中国	島根県立横田高等学校	「雨はワタシの背中を押す」	伊藤　靖之／作			○	○				2	優良
	4	九州	鹿児島県立屋久島高等学校	「ジョン・デンバーへの手紙」	上田　美和／作	○	○	○	○	○	○	○	7	優秀
	5	開催県	佐賀県立佐賀東高等学校	「君がはじめて泣いた日も、世界は普通の顔をした。」	いやどみ☆こ～せい・佐賀東高校演劇部／作									優良
7月28日(日)	6	北海道	帯広北高等学校	「放課後談話」	加藤真紀子／作	○			○	○		○	4	優秀
	7	東北	福島県立ふたば未来学園高等学校	「Indrah ～カズコになろうよ～」	ふたば未来学園高校演劇部　齋藤夏菜子／作			○		○	○	○	4	優秀
	8	関東	逗子開成高等学校（神奈川）	「ケチャップ・オブ・ザ・デッド」	飛塚　周・逗子開成高校演劇部／作	○	○	○	○	○	○	○	7	最優秀
	9	関東	埼玉県立新座柳瀬高等学校	「Ernest!?」	オスカー・ワイルド／原作 稲葉　智己／翻案									優良
	10	中部日本	岐阜県立長良高等学校	「My Name！ ～The Importance of Being Earnest～」	オスカー・ワイルド／原作 長良高校演劇部／翻案									優良
7月29日(月)	11	関東	日本大学鶴ヶ丘高等学校（東京）	「屋上の話」	むらやまだいすけ／作									優良
	12	四国	香川県立丸亀高等学校	「馬鹿も休み休みYEAH!!」	豊嶋了子と丸高演劇部／作		○				○		2	優良

栃木県立小山城南高等学校

大谷高等学校

島根県立横田高等学校

鹿児島県立屋久島高等学校

佐賀県立佐賀東高等学校

帯広北高等学校

福島県立ふたば未来学園高等学校

逗子開成高等学校

埼玉県立新座柳瀬高等学校

岐阜県立長良高等学校

日本大学鶴ヶ丘高等学校

香川県立丸亀高等学校

「お礼～佐賀大会を支えてくださった皆様へ」

真子　多恵

第65回全国高等学校演劇大会は７月27日（土）から29日（月）までの３日間、鳥栖市民文化会館を会場に開催され無事に終了しました。

数年前から「演劇部が10校前後しかない佐賀県で全国大会ができるのか」とご心配をおかけしていたと思います。佐賀県大会を開催するに当たっての重大な懸念事項は２つありました。①顧問・部員数の圧倒的な不足②会場のスペース、設備不足です。その点に関しては以下のような結果となりました。

① 顧問一人一人にかかる負担はとても重いものでした。大会中は心身ともに余裕のない状態で疲労困憊だったと思います。演劇部員も11校90人弱と少なかったのですが、彼らの笑顔と献身的な働きが大会を成功に導いたとも言えます。生徒実行委員長、副委員長の２人はすばらしいリーダーでした。一緒に活動した演劇部以外の生徒たちも演劇部員たちに混じって楽しんでいました。

② 舞台技術創造講習会では小ホールの設備にあわせた舞台技術を提案していただき、生徒講評委員会では机は使わずに膝をつき合わせて座るなど、会場に合わせた工夫をしました。近くの体育館、図書館、高校を利用したのは成功だったと思います。

実際、運営上のミスや混乱もありましたが、それを寛大なお心でお許しいただき、支援をしてくださった多くの方々のおかげで大会を運営することができました。全国理事、全国事務局、九州理事、先催県、後催県の皆様、上演校、審査員講師の先生方、講評委員、佐賀県の運営職員・生徒のみなさん、本当にお世話になりました。

大会を盛り上げてくれたのはやはり、主役である高校生たちでした。全国の８ブロックを勝ち上がった12校の作品は、この数ヶ月のうちに役者、台本、舞台美術、音響、照明が様々に変更され、練り直されました。その舞台は満員の観客の胸を打ち、笑いや涙を誘い、万雷の拍手を頂戴いたしました。また上演後の生徒講評委員による合評会では、その熱弁に多くの人が耳を傾けました。その成果として、審査員とは違った高校生の視点で講評文が作成されました。舞台技術創造講習会は、プロの舞台美術家等の指導のもと５日間行われ、最終日に上演と講習の総括がありました。そして審査員の方による５つの講習会も行われました。表彰式前には、審査員の先生から鋭く熱い講評をいただきました。大会は高校演劇関係者の学びの場でもありました。

先日、東京公演を見に行かせていただきました。こんなに素晴らしい高校演劇が鳥栖市民文化会館で披露されていたのかと思うと、とても誇らしく思いました。

大会を支えてくださったすべての方へ、心から感謝を申し上げます。

本当にありがとうございました。

（第43回全国高等学校総合文化祭演劇部門　代表委員）

演劇が繋いだ私の青春

吉崎　花菜

とても楽しかった「さが総文」が幕を閉じました。上演校の皆さん、審査員の先生方、生徒実行委員の皆さん、顧問の先生方、大変お疲れ様でした。

私にとってあの３日間は、夢のような日々でした。１年生の10月に実行委員長に選んでいただき、最初はなにもわからず、自覚もあまりありませんでした。信州総文の視察に行き、たくさんのことを学ぶと同時に、こんなに大変な仕事を私たちでやらなければならないということへの不安も出てきました。しかし、閉会式のあと信州総文の実行委員長さんの話を聞いて、全国大会を引っ張っていくことの大変さを痛感し、私がしっかりしないといけないと決意しました。それから本番まではあっという間でした。「おもてなし」という言葉を胸に、佐賀のことをたくさん知ってもらおうと議論し、当日はお客様のたくさんの笑顔の中で仕事をすることができました。意見がうまく伝わらなかったり、本番に予期せぬアクシデントが起こってしまったりして辛くて泣いてしまった日もありましたが、お客様の笑顔と全力で頑張っている演劇の仲間の情熱を目の前で感じたこの「さが総文」は、私の青春に人生の財産として確かな１ページを刻みました。

上演校の皆さんの輝いている姿と会場にいらっしゃったすべての皆さんが「演劇」を通してたくさんの笑顔で繋がれたことを私たちも嬉しく思います。会場を笑いと涙で包んでくれた上演校の皆さん、頼りない委員長についてきてくれた運営生徒の皆、私たち生徒の何倍も大変で、それでも笑顔を絶やさず接してくださった先生方、その他今大会に関わってくださった方々に心よりお礼申し上げます。この全国大会という大舞台の運営に関わらせていただいたことをとても喜ばしく思っています。47年に一度の奇跡を、日本で一番熱い夏を佐賀で過ごせてとても幸せです。来年のこうち総文の成功を願っています。また、これからも演劇の輪が広がっていくことを祈っております。３日間本当にありがとうございました。

（生徒実行委員長　佐賀清和高等学校）

「総文祭を終えて」

佐藤　優帆

講評委員長になることが決まってからの２年間は私にとって挑戦の連続でした。こんなに多くの人と関わった経験は今までになく、また私自身人見知りであることもあり、委員長としてみんなの活動をサポート出来るかとても不安でした。次年度開催県として長野へ研修に行った時も、委員長が責任をもって委員をまとめる姿を見て、いいチームに参加させてもらったなと思いつつ、来年私に同じことが出来るか少し不安に思っていました。しかし今年度、大会の２日前、全国から委員の仲間たちが集まり、いざ研修を始めるとみんな笑顔で話しかけに来てくれて、すぐに打ち解けることができました。研修中、討論の練習をしたり交流会のためにダンスの練習をしたりするなかで、だんだん互いに信頼が強くなり、それが本番に向けて大きな自信になりました。そうして迎えた本番では緊張しつつも自分の意見を伝えることが出来、講評も無事成功に終わりました。大会を通して自分の成長を感じましたが、それ以上に人に恵まれたなあと思います。

大会が終わって一番に思ったのは「やっぱり高校演劇っていいな」ということでした。上演された12の作品全てに各上演校の熱い想いが詰まっているのを感じ、どの作品にも強く心を揺さぶられました。高校生が役者、照明、音響、演出、全ての役割をするというのは「高校」演劇ですから当然のことですが、だからこそ、強く伝わることがあるのだなと講評を通して感じました。

最後に大会中で一番嬉しかったことについて書きたいと思います。上演校の生徒さんが講評委員である私達にありがとうと言ってくださったことです。２年間頑張って良かったなと思いました。本当に嬉しかったです。

沢山の方の支えでとても素敵な経験をさせて頂きました。本当にありがとうございました。来年の高知大会の講評活動がより一層素晴らしいものになることを心よりお祈りします。

（東明館高等学校）

『“作劇”を中心に』

鐘下　辰男

さすが全国大会。丁寧に創りこまれた作品ばかりであらためて高校演劇の素晴らしさを堪能させていただきました。創作が多いこともあり、主に「作劇」の観点から記したいと思います。戯曲には一応「セオリー」があります。ただそれを守れば「正解」というわけではありません。野球の試合、後半0対0の均衡状態、ノーアウトでランナー出塁。この場合の定石は送りバント。セオリーとはこうしたものです。要は踏襲した方が効果的に観客を動かせる可能性が高い（ハリウッド映画を想像してください）。でも野球も時にその定石を破り強攻策、なんてこともあります。だから絶対ではありません。ただ知っていた方があえて破る冒険も可能。つまり表現の幅もひろがるかもしれません。

■栃木県立小山城南高等学校

偏見に悩む者が、最終的に多数者を前（＝全校集会）に意思表明。これは一種の「成長物語」です。もったいないのは主人公の心情告白が目立つ点です。成長物語にもセオリーがあります。宮﨑駿の『魔女の宅急便』を想像してください。それは「困難の克服」です。マイノリティの意思表示にはどんな困難？

それに主人公はどう打ち勝つ？　それが加わればよりダイナミックな物語になったかもしれません。

■大谷高等学校

「ダメ部類」な生徒たちが生徒確保のため（つまり学校礼賛の）その学校の作品づくり。相当魅力的な設定です。もったいなのはある種のノスタルジーや個々の問題に偏りすぎた点です。戯曲セオリーの一つに「障害」があります。人間には「欲求」がある。でもそれは満たされない。なぜなら障害があるから。教科書的に言えばこの欲求と障害のせめぎ合いがドラマ形成の基本です。時間に関するだけでなくもっと「障害」があって、それをクリアしていく中で彼女たちが変貌していくプロット展開ならばより重厚な物語になったと思います。

■島根県立横田高等学校

一番「現代性」を感じました。「新しい選択を迫られる。人生とは、その連続だ」いわゆる「再帰性」「自由の牢獄」、そんな状態にある現代の私たちの姿を時にシリアスに、時にユーモアを交え描く戯曲に感心です。演出面においても演劇的センスに満ちあふれた舞台でした。震災の影響をこうした形で引きずる現代の高校生の描き方に刺激もいただきました。

■鹿児島県立屋久島高等学校

詳細は舞台講評で述べたとおり。「高校演劇」の奥深さはもちろん「演劇」の持つ「すごさ」を見せつけられました。特に役者の「存在感」は素晴らしく、あらためて「演技」とはなにかも考えさせられ、作劇も実によかったです。演出的にはいくつか注文もありますが、この作品を「目撃」できたのは本当に至福です。

■佐賀県立佐賀東高等学校

「戦争は悪」。これは多くの人が納得するメッセージでしょう。ただ「なぜ悪か？」を本当の意味で人々に感知させるのは実は難しい。高畑勲の『火垂るの墓』などを想像するといいかもしれません（本人の意図とは反するでしょうが）。「命は大切」も同様です。誰もが至極当然と思っているからこそ「なぜ大切？」を真に感知させるのは本当に至難の業です。演劇用語で「他者」というのがあります。自分とは「違う」人間です。他者に「どう」発信するか、それが演劇表現の第一歩です。SNSは自身の発信に「共感」した者と「だけ」つながる傾向がありますが、演劇がそれと決定的に違うのは、「どう」つながれるかを「模索」することです。ただこうした問題にあえて取り組んだみなさんの姿勢に、勇気をいただいたのも事実です。

■帯広北高等学校

演劇部に入部させたいという「欲求」が「障害」を越えその「目的」を果たす。明確なドラマ構成です。障害の象徴は「携帯」と「モノローグ」。でも二人は同空間で「会話」することで最後は共に「演劇」を。この作品は一種の「演劇論」にもなっています。惜しむらくは、演出面の工夫ですが充分堪能させていただきました。

■福島県立ふたば未来学園高等学校

自分たちの問題を自分たちの「言葉」で表現するからこそ、異なる震災経験をしているみなさんにとっての「他者」である私にもダイレクトに伝わってきました。これは欲ですが、ドラマ教育の基本を日々の訓練で習得しているみなさんが創るフィクションも見てみたいと思いました。

■逗子開成高等学校

骨格を決め、それに従いプロットをどう組み立てるか。この組み方にセオリーがあるわけです。まさ

にその見本ともいうべき作品です。その組み立ての見事さが、結果物語をダイナミックに展開させ、私たちを飽きさせず劇世界に誘うことに成功しています。小道具（特に消え物）の使用等、舞台でこそ有効な演出も取り入れられ、演劇的にも成功している作品でした。

■埼玉県立新座柳瀬高等学校

舞台セットが丁寧に作り込まれ、相当資料を調べるなどの研究がされたのではないかと想像します。よく言われることに演劇は「総合芸術」というのがあります。観客の目に晒されるものに対してはどんな妥協も許さず、丁寧に作り込む、そうした姿勢に感心しました。同様、演技の考察をより深めれば、重厚感のある舞台になったと思います。

■岐阜県立長良高等学校

創作脚本が「自分」との出会いとするならば、既成脚本は「他者」との出会いです。どちらも演劇には欠かせない要素です。昨今はどうしても「自分」問題へと固執してしまう傾向が多い中、先の新座柳瀬高等学校同様、あえて「他者」という視点から演劇に向き合った姿勢に好感します。それでいて「自分」たちなりの世界観が舞台セットにも現れ、「表現」の原型を垣間見た気がしました。

■日本大学鶴ヶ丘高等学校

上演前に台本は読みません。一観客として新鮮に見たいからです。私は当初、この作品は一種の寓話だと思いました。寓話故にとてもすぐれた作品だと。ですが後半出てくる震災という「具体」、加えて実は自殺志願者を助けるための演劇部の善意というオチ。こうした二重構造を取り入れたい気持ちは重々わかりますが、あの寓話性が破壊されたことがただただ悔しい。どうしても二重構造を生かしたいなら、震災で苦しむ生徒の自殺を食い止め「楽しかった」「いいことしたかな」などと発する当の演劇部員たちへの批評性が加われば、より考えさせる作品になったのではないでしょうか。

■香川県立丸亀高等学校

男子生徒たちの彼女に対する対人スタンスが、最後まで「アイドル」という捉え方から脱却できてない（ように見える）のが残念です。悲しいかなアイドルとは所詮は人々の欲望を満たす「商品」という側面もあります。両者の交流が進行するにつれ（彼女の秘密を知るなど）自己の欲望を満たす道具（＝アイドル）から一人の他者（＝人間）へと変わり、両者の関係が劇的に変化する。つまり男子生徒たちの「成長物語」にもなっていたらもっと堪能できたかもしれません。

（劇作家・演出家／THE・GAZIRA主宰／桜美林大学准教授）

舞台に広がる新しい世界

山口　宏子

■はじめに

高校演劇の審査には「怖さ」を感じます。「この日」に賭ける舞台と向き合う緊張に加え、タイプもスタイルも異なる作品を見比べなくてはならないからです。

私は、多くの舞台を観てきた経験の中で出来た「いい演劇とは」という物差しをよりどころに、審査に臨みました。目に見えないこの物差しは、優れた作品に出会うたびにバージョンアップしますが、変わらない尺度があります。まず「作品がきちんと、豊かさをもって伝わってきたか」。せりふや動きなどに始まり、作り手の考えや思いがどう届いたか、戯曲の構成や言葉の選び方、演出などにどんな工夫があるか―といった基本的なことです。そのうえで、「この劇を観たことで、新しい世界が広がったか」を重く考えます。

上演12作品は総じて水準が高く、いずれも力のこもった舞台でした。その中で、屋久島高校『ジョン・デンバーへの手紙』と逗子開成高校『ケチャップ・オブ・ザ・デッド』が、最優秀を競いました。

地元の歴史に取材し、地域で生きる人たちを丁寧に描く『ジョン・デンバー～』は、王道をゆく本格派。一方、学生がゾンビと遭遇する『ケチャップ～』はコメディで、かなりの変化球。舞台成果は甲乙つけがたい。さあ、どうするか。

最終的に『ケチャップ～』を推しました。私はこの劇に、「生と死」「人間というもの」に対する観客の思考を拡張しようとする野心を感じた。そして、それが喜劇の形で実現していた、と思ったからです。その冒険心と達成に対して、一票を投じました。

各作品への考えを書く前に、一つ、複数の作品に共通する課題を指摘したいと思います。題名の付け方です。部活動だから、基本、好きなように付ければいい。ただ、演劇は、ひとに見てもらって初めて成立するもの。題名は他者への最初のメッセージで

す。だから、できるだけ、作品を端的に表す言葉を厳選するべきだと私は考えます。過剰な思い入れ、意味のとりにくい言葉、劇を見終わっても「なるほど」と腑に落ちない、そんな題名が付いた作品には、内容にも独りよがりな部分があることが多い。プロの作品も含めて、経験上、そう感じます。題名を決める時に、「見知らぬ誰かにどう届くか」と想像してみることを勧めます。

■12作品と向き合う　1日目

栃木県立小山城南高等学校『無空の望』は、「女子はスカート」という考えに納得できない日向と、男という性自認が揺らぐ清を軸に、「自分らしくありたい」ともがく高校生の姿を描く。学校や社会の同調圧力が生み出す「普通」を問い直す今日的な作品だ。幼さの残る友人の悟やオタク女子コンビなど多彩な人物を配し、借り物ではない言葉で、出来るだけ多くの視点から語ろうとした誠実な創作姿勢に好感を持った。おとなや生徒会長の造形に厚みが増せば、より充実した作品になるだろう。

大谷高等学校『ふじんど』は猛烈なパワーで60分を駆け抜けた。しょーもないギャグと、気の利いたユーモアがふんだんに埋め込まれた関西弁の会話がハイスピードで交わされ、独特の熱を発する。よく鍛えられたダンス、照明の使い方など優れた点は多い。饒舌の中に、実は豊かな内容があるのだが、いかんせん、せりふが聞き取りにくく、十分伝わらなかったのが残念だ。

島根県立横田高等学校『雨はワタシの背中を押す』の主人公ワタシは、母を亡くし、成長の節目節目を「おばさま方」の「いってらっしゃい」の声に送られて育つ。この「いってらっしゃい」の繰り返しが劇にリズムを生み、周囲と同調して生きてきたワタシが、「行ってきます」と自分の道を踏みだす終幕にうまくつながった。小学生の時に東日本大震災がおき、昨年の西日本豪雨を身近に体験したワタシの心の中に常にある「死」への意識と、「誰かのために」という思いは、現在の高校生にとってリアルな感覚なのだろう。舞台の高さや奥行、照明の色など空間の表現がうまかった。

屋久島の人たちが、世界でも稀有な自然を守った闘いの歩みをつづる**鹿児島県立屋久島高等学校『ジョン・デンバーへの手紙』**は、完成度の高い秀作だった。高度成長期、杉の伐採が進み、島の自然が壊れてゆくのに危機感を抱いた教師・耕作は、仲間とともに保護運動を展開する。「実情を伝える記録映画に音楽を使わせてほしい」と、米国の歌手ジョン・デンバーに手紙を書くという枠組みを使い、数世紀にわたる人と森林との関わりや、島の自然の特性を、説明調でなく語る作劇が巧み。ドラマの中心でブレない存在ではあるが、英雄然とせず、深く内省する耕作の人物造形が優れていて、周囲の人々も膨らみを持って書かれている。杉を伐採する側の人々にも思いを致していることで、作品の説得力が増した。演技もうまい。終盤、映画が投影されるが、そのインパクトに負けない、堂々たる舞台。わずか60分だが「大作」の風格があった。

佐賀県立佐賀東高等学校『君がはじめて泣いた日も、世界は普通の顔をした。』は、高校生の妊娠をめぐり、「命」を考えた作品。リサーチや議論を重ねたという真摯な取り組みだ。感情表現や美しいダンスシーンなどで演者の実力もわかる。だが、作り手の意図は違ったのかもしれないが、結果として「中絶より出産」の価値観を支持する劇に見えた。命が尊いことに異論はない。だが、長い時間をかけて女性が獲得した「生まない権利」をどう考えるのか。男性への言及も乏しい。涙を誘うだけでは一面的だ。繰り返すが、これは作者の意図ではなく、「どう見えたか」という結果への論評である。

■12作品と向き合う　2日目

帯広北高等学校『放課後談話』は、奇妙な引力を持つ佳作だった。放課後、ベンチに松下が座っている。そこへ賀来がやってきて雑談をする。動きのほとんどない、力の抜けた二人芝居。これがなんともおもしろい。賀来が、実質自分1人しかいない演劇部に、松下を誘おうとするのが唯一の筋。会話の合間に結構しつこく勧誘するが、話しぶりに押しつけがましさがなく、ユーモラスな中に真情がにじむ。とりとめがないようで、コミュニケーションについての様々な見方が盛り込まれている台本が知的だった。

高校演劇の1年は秋から始まるため、地域の大会と翌年度の全国大会で出演者が変わることも多い。

福島県立ふたば未来学園高等学校『Indrah～カズコになろうよ』では、タイトルロールの留学生インドラがマレーシアに帰国してしまった。だが、彼女の「不在」が、常に移ろう現実や、目の前から消えても確かにあるものへの思い、といった主題をくっきり映し出した。生徒の多くは、震災と原発事故で、

大きな喪失を体験している。そうした個人の物語をモチーフに、2019年の福島の高校生の思いがリリカルに立ち現れた。

まき散らされた丸めた新聞紙、脚立、工事用つい立て、緑のネット。**逗子開成高等学校『ケチャップ・オブ・ザ・デッド』**は、そんな無骨で不穏な空間で繰り広げられる。

男子大学生３人が森でゾンビと出会い、映画を撮ろうとする。ゾンビはかつて孤独の中で自殺した青年で、死んだ後もひとりぼっち。頭を殴ってゾンビを退治する筋立ての映画に出れば、今度こそ本当に死ねる。「死」という希望が生まれ、彼は張り切り、生き生きしてくる。一方、初めはおもしろがっていた学生らは、ゾンビをもてあそぶことに後ろめたさを感じ始める。さらに、彼の遺書を見つけて、人としての輪郭を想像するに至り、すっかり腰が引けてしまう。この両者のズレが、とにかくおかしい。そして、ゾンビという、人でも死体でもない存在が、様々なメタファーに見えてくる。登場人物を自分たちから少し離れた大学生にした設定がうまく、まじめなほどおかしいという喜劇の基本に忠実な演技に観客は爆笑し、熱い拍手をおくった。

オスカー・ワイルドの『真面目が肝心』をもとにした２作が連続して上演される珍しい事態が起きた。原作は、ロンドンと田舎の屋敷で繰り広げられる、架空の友人や偽名、勘違いによる喜劇だ。

埼玉県立新座柳瀬高等学校『Ernest!?』は、場所をロンドンに絞って台本を構成し、重厚な舞台装置で臨んだ。部屋の装置の奥に街灯を置き、空間の広がりをうまく見せる。衣装もフロックコートやドレスなど本格的で、「作り込む楽しさ」があった。喜劇では欠かせないドアの開け閉めや登退場のタイミングで笑わせる場面も成功した。

原作のポイントである「名前」に焦点を絞り、台本を手際よく整理したのは、**岐阜県立長良高等学校『My Name! ～The Importance of Being Earnest～』**。場面転換を「使用人たち」の演技として見せ、劇全体を「これはお芝居です」という額縁で囲んだ。ご都合主義な展開のこの喜劇には、とても有効な演出だ。装置は明るい白と黒で、あえて書き割り風に。これが演出プランとぴったりで、とてもしゃれていた。

■12作品と向き合う　３日目

最も複雑な思いで見終わったのが、**日本大学鶴ケ丘高等学校『屋上の話』**だ。冒頭、校舎の屋上に女子生徒・三田が思い詰めた表情で現れる。歩くだけで自死の決意を表現し、緊張感を作り出す演技がみごと。と、そこへ、もうひとりの女子生徒・長尾が現れ、自分も死のうかと思っていたので仲間ができてよかった、一緒に死のうと、なれなれしく絡み始める。さらに、花束を抱えた男子や、アイドルとそのファンといった珍妙な人たちが次々とやってきて、滑稽に振る舞う。それに巻き込まれ、三田は飛び降りることができなくなる―という全体の８割までは、傑作だった。笑いが現実のこわばりをゆるめ、バカバカしさが命を救う。なんてステキなんだ！　だが、教師や三田の叔母が現れたあたりで期待は急速にしぼみ、この騒ぎは演劇部が仕組んだことだという設定に、ガッカリした。

演劇部員がにやりと笑って満足げに語り合う場面は、自分たちの企みが三田の命がけの絶望より優位にあると認識しているように見える。三田をなんとか引き留めようと、知恵のありったけを絞り、即興でドタバタを演じたということならステキだったのに。

長田が三田に呼びかける「死のうね。明日」は、３日間で最も心に残るせりふだった。ナンセンスな言葉の裏に「だから今日は生きて」という祈りがある。このせりふが象徴する、演劇の力を信じ、その限界も自覚したうえで、目の前の人を必死で笑わせようとする切実さが貫徹されていたら―。

香川県立丸亀高等学校『馬鹿も休み休みYEAH!!』は、進学校の男子たちが同級生ねねを「東大アイドル」に育成しようとする話。ねねが表紙の単語帳「ねね単」だの、オタ芸で

叫ぶ「すいへいリーベ僕のねね」だの、受験生らしいギャグが多い、ハイテンションな喜劇だ。その中に、何か枠を設けなければ人とうまく付き合えないコミュニケーションの不全や、女子を「商品化」する違和感、クラスの中の悪意、受験の重圧など、多様な要素を盛り込むことに成功していた。

（朝日新聞記者）

高校演劇は、現代演劇探求の場！

西垣　耕造

第65回全国高等学校演劇大会に参加できたことに心より感謝致します。私たちは常に、「現代演劇とは何か」と自らに問いながら芝居を創り続けています。

今回の大会は、「現代演劇探求の場」であったと感じました。私たちは以前、モルドバ共和国のウジェーヌ・イヨネスコ劇場の演出家、ペトル・ブトカレウと共に舞台を創りました。その時ペトルは稽古場でこう言いました。「昔の演劇は、内なるものを表現した。でも今は違う、外に在るものを受け止めるんだ！」と。

今回の12校の舞台は、皆さんが自分について、社会について思考し、創り上げてきた過程を感じることが出来ました。人間は、特に高校生の皆さんは常に自分の可能性に向かって存在しています。演劇という芸術は、たとえ、死や歴史を描いた作品であっても常に未来に向かっている芸術です。皆さんは自分自身の可能性を未来に向かって投げかけていた。哲学の概念でいう、投企（とうき）してきたのだと思います。その時自分は、常に周りと関わっており、客席も含め、関わりのないものは存在しません。

舞台と客席の関係でも素敵な空間が生まれました。小説や物語の読者であれば、必然的に、ある状況について語ってもらうことになりますが、演劇の観客は、まさに状況に投げ込まれ、直接問題と向き合うことになります。今回も観客の皆さんは、観ることによって舞台を支え、舞台と共に思考し、互いに討論しました。これは演劇において、最も大切な事であり、高校演劇大会の素晴らしさであると、心から感じました。

栃木県立小山城南高等学校『無空の望』生徒創作で、LGBTの問題に果敢に切り込んだ。LGBTという問題を描きながら終盤、主人公 日向が集会で演説することにより、別世界の問題ではなく、全ての人が、「普通であること」「～らしく」という形のない感覚に縛られている、という問題提起になっていた。また周りの友達が、道化の様な役割を果たすことで支えてた演技は素敵だった。

大谷高等学校『ふじんど』見事なテンポと、素晴らしい身体性に引き込まれた。驚いたのは、台詞や動き（身体）が、一見、自分を主張しているようで、実は相手を支える動きになっている事。役者は常に対象に対する思考や感情で動いていくのだ。最後の先生の台詞が感動的。なぜ感動したか？ それは内容や意味でなく、誰かの為にやりきった役者の姿があったからだ。

島根県立横田高等学校『雨はワタシの背中を押す』学校教育のなかで起こる矛盾。成長していくなかでの社会との関わりに対する葛藤。だが全てを打ち消してしまう災害。葛藤や不自由さを描いたが、感情を表出するのではなく、感情を持つことで相手と向かい合った。だから台詞が心に響いた。「私、背中を押す人になりたいです」、演劇によって人の背中を押してくれた舞台だった。

鹿児島県立屋久島高等学校『ジョン・デンバーへの手紙』役者の演技が秀逸であった。それは「見る・聞く」ことをおろそかにせず、そこから創られていたからだろう。主人公 耕作は勿論だが、仲間の純夫や孝好の演技は、相手を支え存在させることに成功していた。地元の方を含め、多くの方に愛されたことだろう。演劇とは、共に演劇を愛する仲間をつくる行動でもあるのだ。

佐賀県立佐賀東高等学校『君がはじめて泣いた日も、世界は普通の顔をした。』集団創作として秀逸な舞台。舞台上での、集団の動きが抜群。１対大人数で向き合った時、１対１で向き合った時、役者の身体にある重量感がしっかりある。だから関係性がより伝わってくる。最後の真希の６年後の姿は、みんなの願いであるかもしれない。私達も共に考えていかなければならない。

帯広北高等学校『放課後談話』２人の何気ない会話で 学校というひとつの世界について、様々な想像力を与えてくれた。この舞台は観客をリラックスさせることに成功した。 観客は常に感動しなければならないというリスクを背負っているとも言える。２人の誠実さは、観客をそこから解放し、感情移入よりも、むしろ驚きや関心を創り出すことに成功し

たのではないか。

福島県立ふたば未来学園高等学校『Indrah～カズコになろうよ～』演劇で話の筋を伝える“語り手”を退場させたことから始まっている。そして、「やってみよう」というところから出発して、ストーリーでなく、人や空間、時間を理解するところから展開していく。演劇は認識のプロセスである。「やってみせる」からわかる。「やってみせる」から、人の変化を感じることが出来るのだ。

逗子開成高等学校『ケチャップ・オブ・ザ・デッド』しっかりと計算して創られているのだが、感受性を失わず、その場で起こったことを大切にしている。コミカルな面もあるが根底に、アクションとリアクションがしっかりしており、それがお互い４人の時も、３人の時も相手を支え、存在させることに繋がった。だから、状況の再現ではなく、状況の発見に繋がったのだ。

埼玉県立新座柳瀬高等学校『Ernest!?』舞台美術・衣装が素晴らしく、役者に新鮮な息吹を与えた。役者は、衣装によって身体が変わり、ソファに隠れたり、ドアをただの出入口でなく変化の境界線として捉えるなど、舞台装置と共に空間を創っていった。だから台詞と身体が一体となった。台詞は演技において、重要なものであるが、動きの一部でもあると再確認させてくれた舞台。

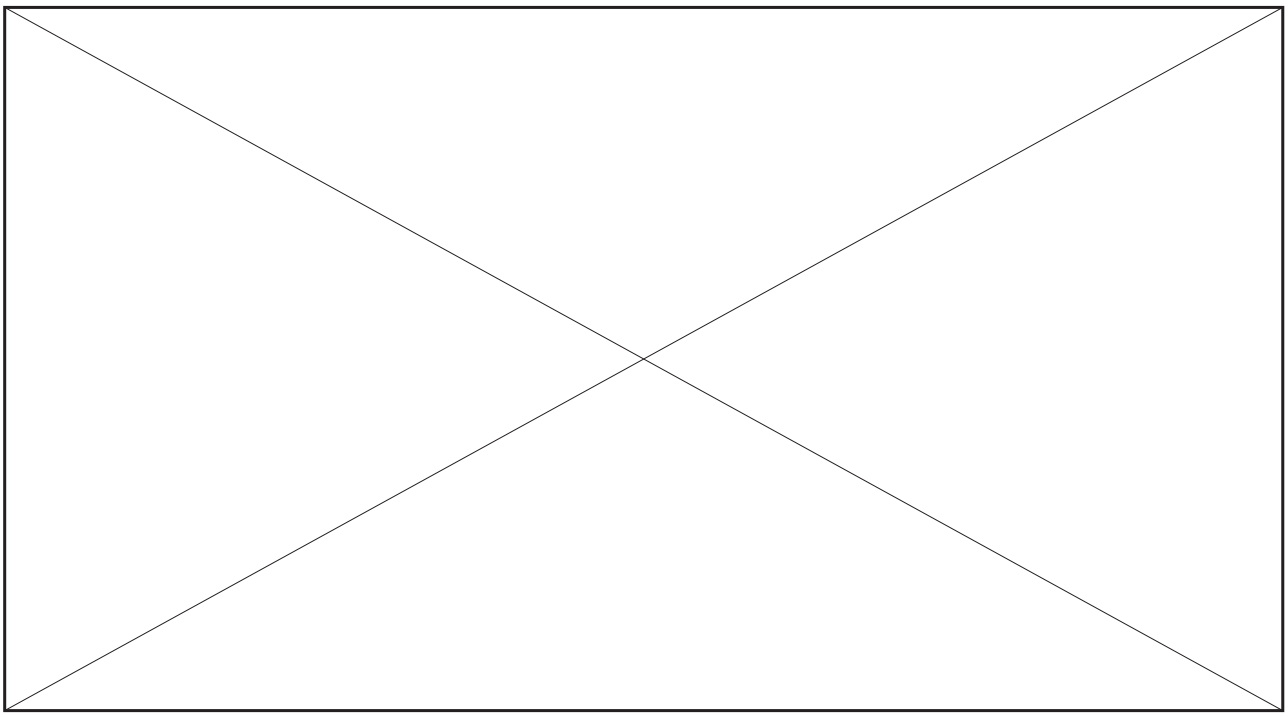
岐阜県立長良高等学校『My Name! ～The Importance of Being Earnest～』男性の身体全体から出るコミカルさと、女性の力強さの対比がとても楽しい。原作を上手く構成し、観客がこの世界に入りやすいよう工夫されていた。また、使用人役の役者の動きが秀逸。役者は舞台上で、台詞は無くとも、多くの人を支え、豊かな表現が出来るということを実践してくれた。

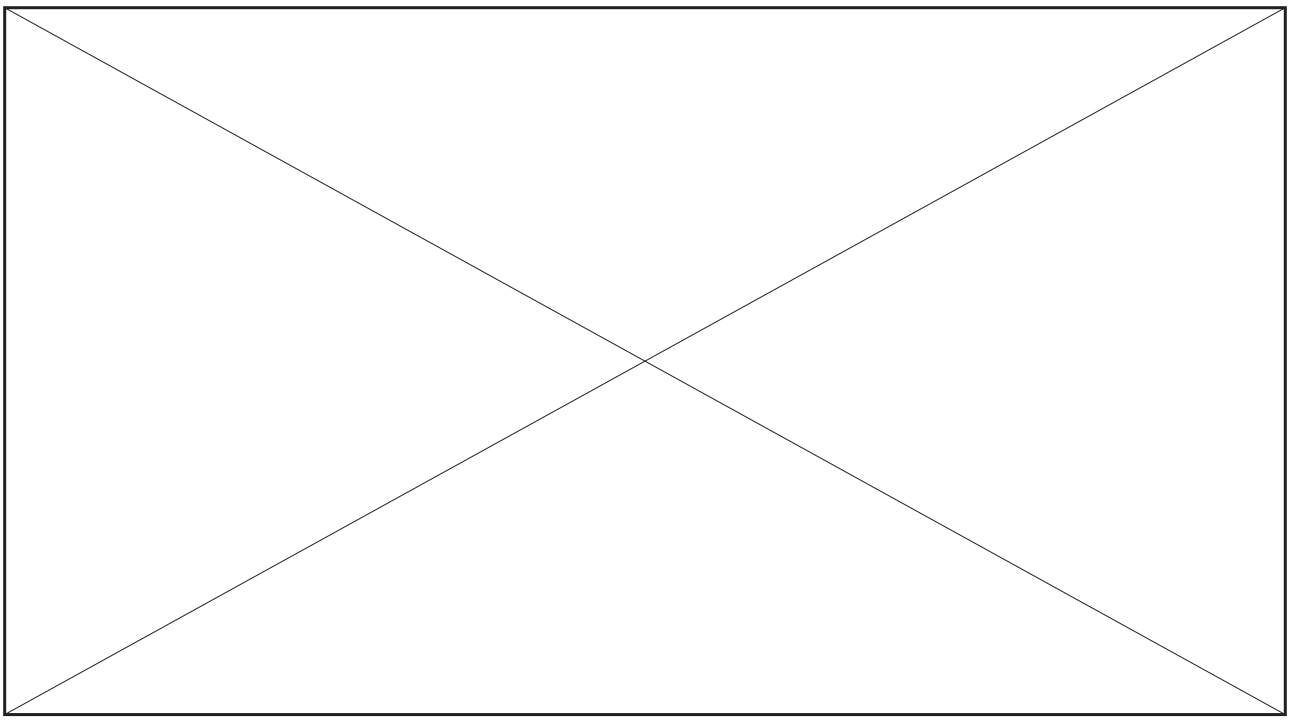
日本大学鶴ヶ丘高等学校『屋上の話』屋上の何も無い空間に役者が登場し、様々な出来事が生まれる。この作品は自殺しようとする少女と、実はそれを助けようとした演劇部という展開があるのだが、素晴らしかったのは、舞台上でお互いを観察し、瞬間瞬間を創り出したこと。演劇の持つ具象性、いまここで、という瞬間を精一杯生きることを示してくれた舞台だった。

香川県立丸亀高等学校『馬鹿も休み休みYEAH!!』コメディに真正面から、全身全霊をかけて取り組んだ。私はこの舞台への取り組みに、とても美しいものを感じました。笑ってもらいたいと思って精一杯やりきる。笑ってもらうには常に思考しなければならない。実際に集団の動きや身体を使った表現は秀逸だった。人に対して必死になれる時、見えざるものが見えてくるのだと感じた。

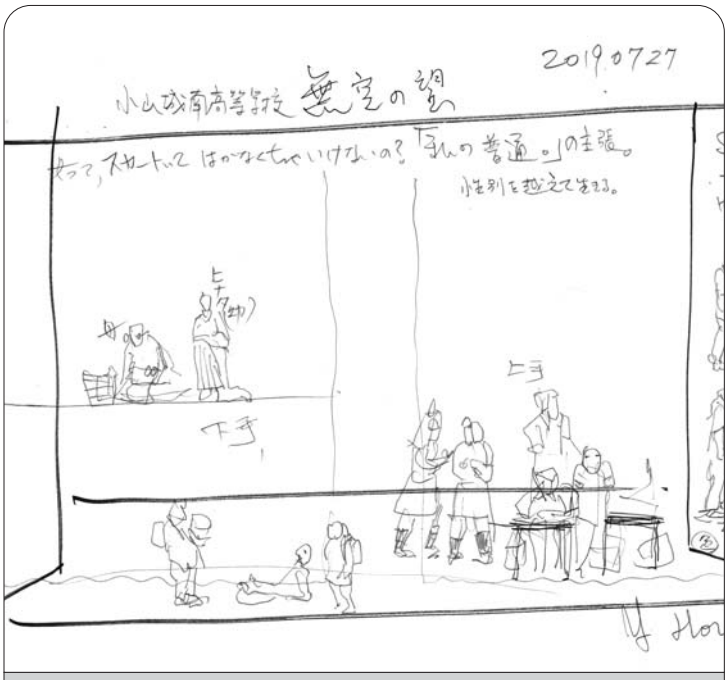
「良い観客に出会えれば役者は育つもの」観客の皆さん。支えて下さった佐賀県の皆さんに心から感謝！

（東京演劇集団風・俳優・演出）

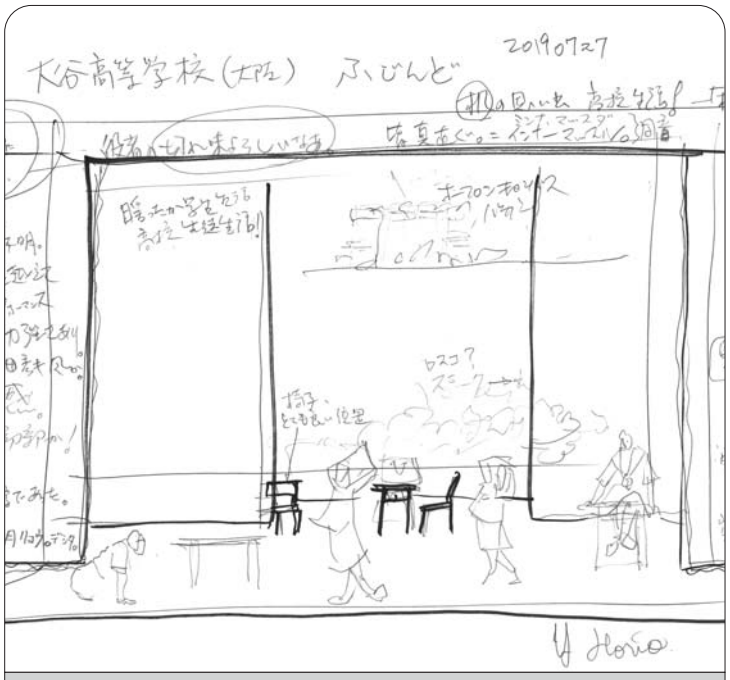




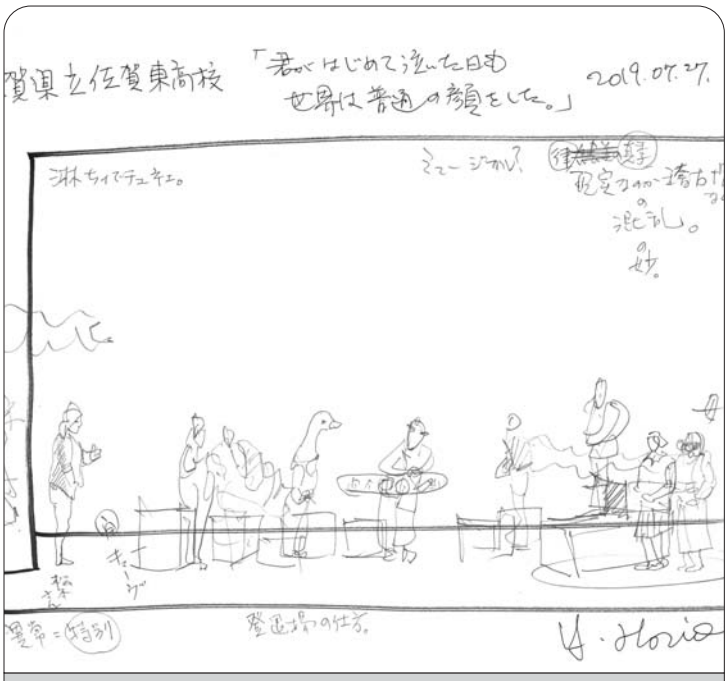
第65回佐賀大会



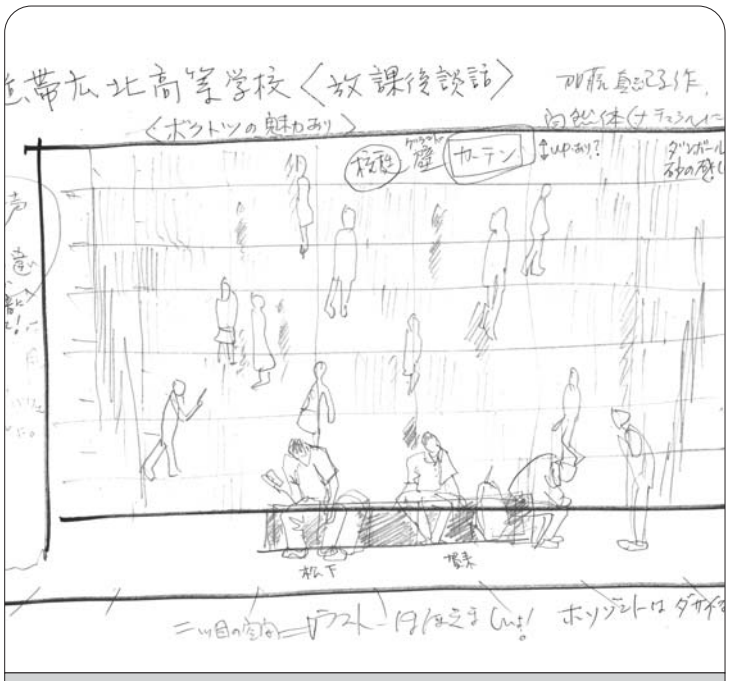
栃木・小山城南高等学校
「無空の望」



大阪・大谷高等学校
「ふじんど」

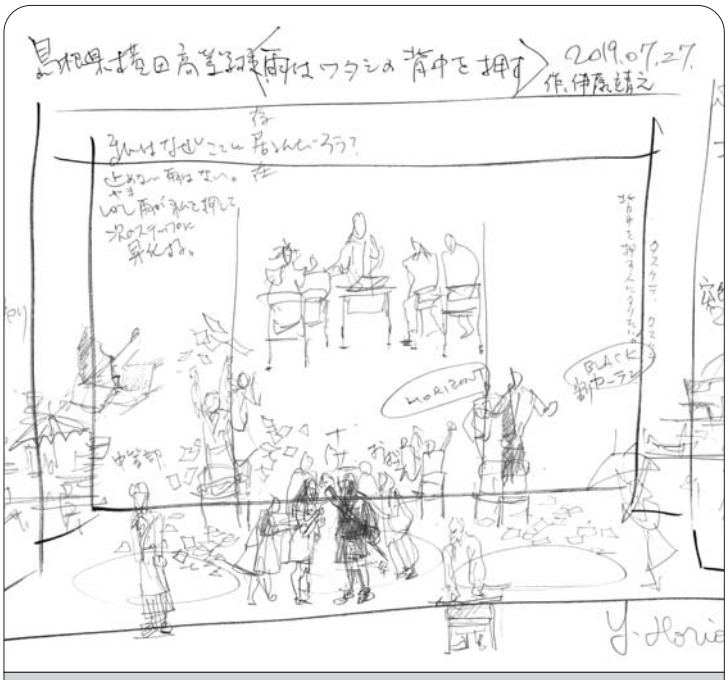


佐賀・佐賀東高等学校
「君がはじめて泣いた日も、世界は普通の顔をした。」

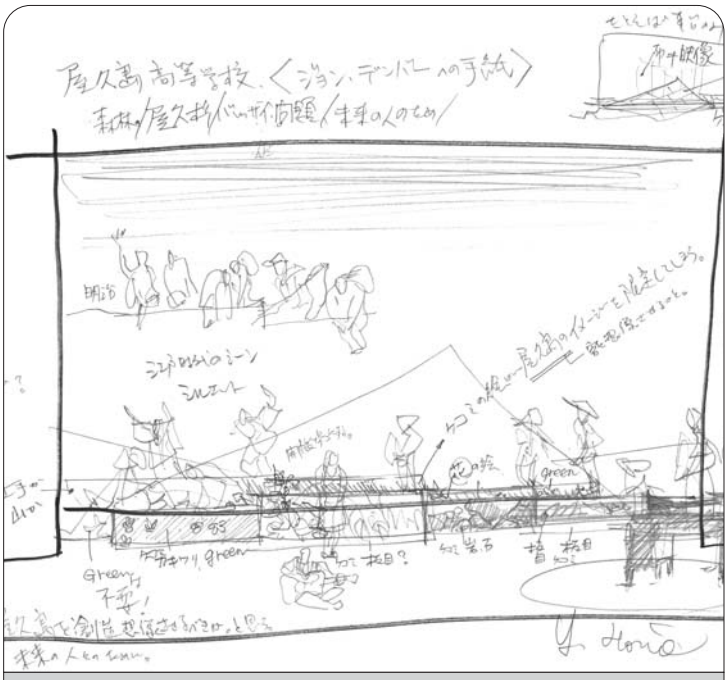


北海道・帯広北高等学校
「放課後談話」

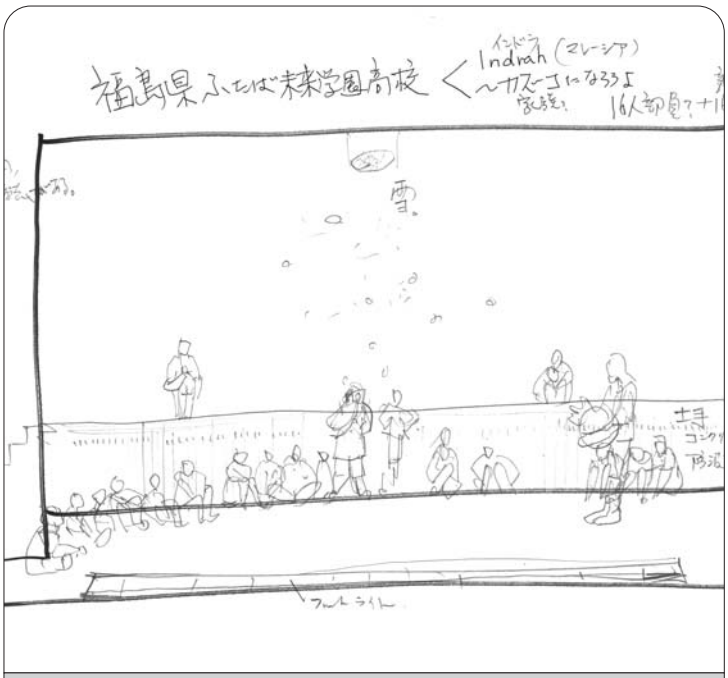
舞　台　図　（1）



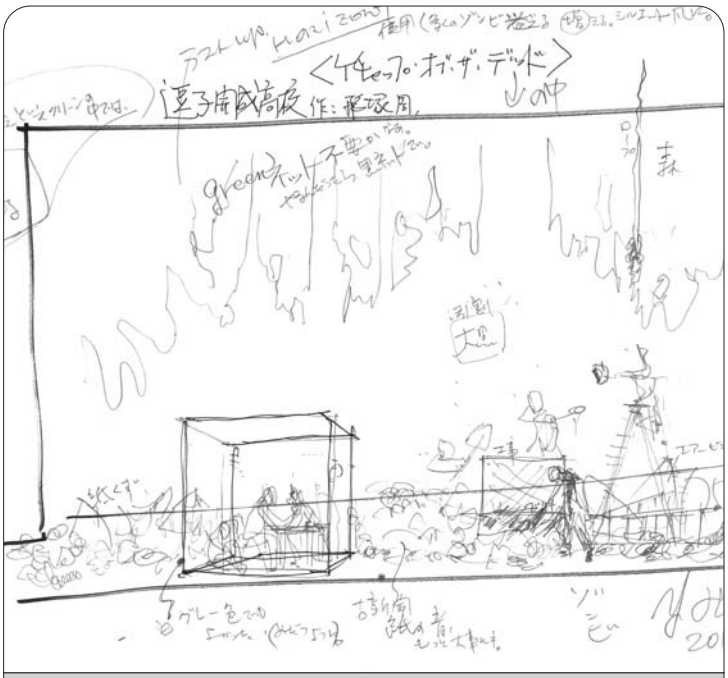
島根・横田高等学校
「雨はワタシの背中を押す」



鹿児島・屋久島高等学校
「ジョン・デンバーへの手紙」

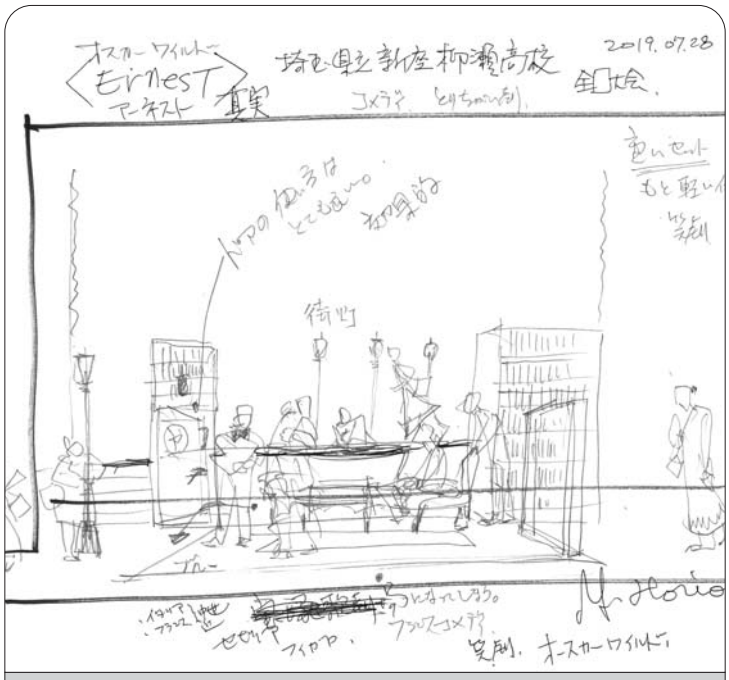


福島・ふたば未来学園高等学校
「Indrah～カズコになろうよ～」

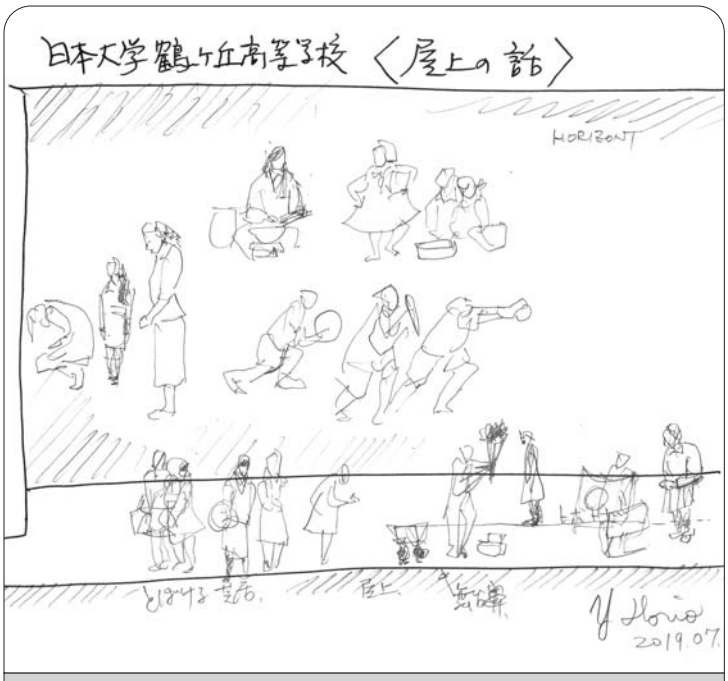


神奈川・逗子開成高等学校
「ケチャップ・オブ・ザ・デッド」

第65回佐賀大会



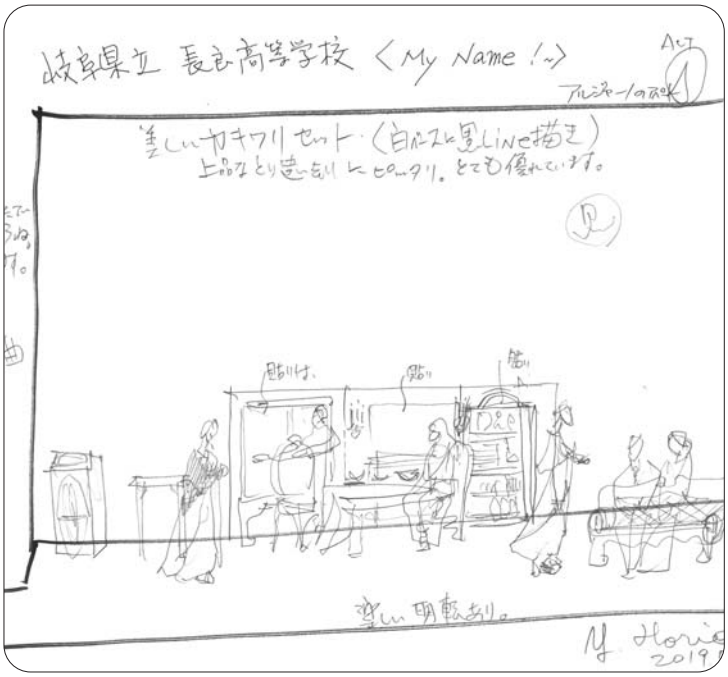
埼玉・新座柳瀬高等学校
「Ernest!?」

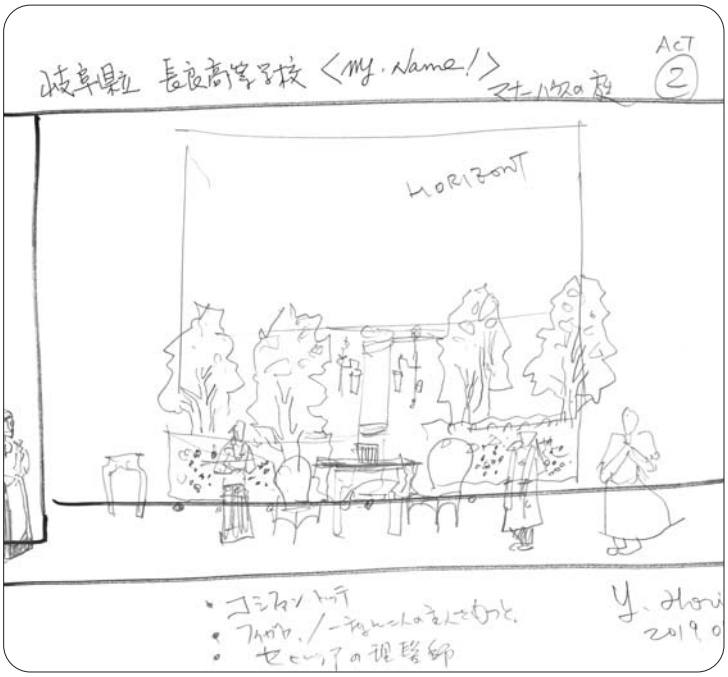


東京・日本大学鶴ヶ丘高等学校
「屋上の話」

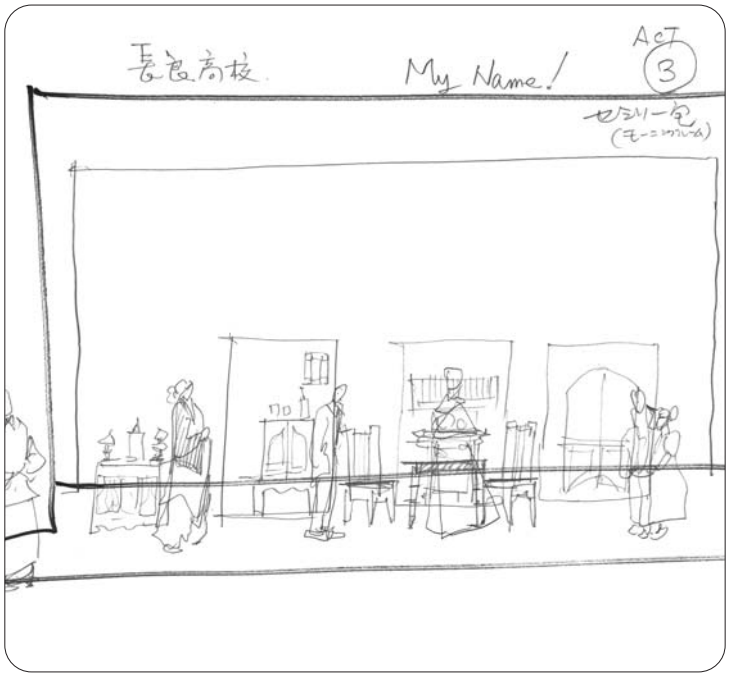
香川・丸亀高等学校
「馬鹿も休み休みYEAH!!」

舞　台　図　（2）





岐阜・長良高等学校
「My Name！ ～The Importance of Being Earnest～」



多様な表現と多様性を表現すること

五十嵐英実

①栃木県立小山城南高等学校『無空の望』日向は、自分らしくありたいともがく。それは誰であれ自我の芽生えに伴って通らなければならない試練であろう。この舞台には、台詞の中にLGBTという言葉は一切出てこない。この言葉の社会的浸透には、「理解」という名のもとに人を見ずに一つの枠の中へと落とし込む側面があることへの配慮であると受け取った。見終わって、現代はむしろ「自分らしく」ということ自体が、生きにくさを強いているのではないかと思い至った。　**②大谷高等学校『ふじんど』**洗練された演出、鍛えられた身体によって表現される青春の苦さと優しさに溢れる舞台だった。エネルギーに満ちた身体に、苦さやもどかしさ、孤高と依存がないまぜの心。古い机の妖精が、その時期を通り過ぎた大人にも、混沌としていたかつての自分を思い出させる。「初めて他人のために頭を働かせた」武藤が、自分の至らなさに打ち萎れる姿が切ない。幕開きですんなり入り込めたなら、と惜しまれる。脚本も含め、魅力に満ちた作品。　**③島根県立横田高等学校『雨はワタシの背中を押す』**ワタシには理解できなくとも、突然の雨のように不幸は訪れる。絶望がセンセイに覚悟を抱かせたように、ワタシの苦しみはワタシの背中を押す。そしてそれが、また誰かの背中を押す。後ろからそっと誰かを励ますような作品だった。「誰かのために何かをしたい」という思いが、今大会中いくつもの舞台で語られた。その根っこには、人格や人生観が作られ始める10歳という年頃に震災を体験したことが影響しているのだと、気づかされた。
④鹿児島県立屋久島高等学校『ジョン・デンバーへの手紙』「５年でこれか。小さいのう」利益の優先と屋久杉の時間の対比が、この一言で伝わる。だが、この物語は、自然破壊を一方的に糾弾はしない。島には生活がある。「正しい」ことが真に正義とは限らない。永山のためらいも迷いも丁寧に描かれているからこそ、心を打たれ、くにえの父にも共感ができる。「正しさ」を大上段から振りかざさないからこそ、一つの島の物語が、普遍的な課題として、観る者の心に訴えられていくのだ。　**⑤佐賀県立佐賀東高等学校『君がはじめて泣いた日も、世界は普通の顔をした。』**人としての正しい選択。守りたい生き方。誰しも「正しさ」を求めて葛藤している。その答えは、他者の姿や言葉、社会の規範、自分の思索などによってもたらされる。ただし、出した答えの正しさを証明できるのは、その後の自身の生き方でしかない。だからこそ、自分の出した答えに他者を同調させようとしてはならない。松本さんの言動に、「正しさ」へ導くことの危うさを学んだ。　**⑥帯広北高等学校『放課後談話』**演劇には動きがなくてはならない、という固定観念をブチ壊してくれた。緩い賀来の呼吸が観客をリラックスさせ、他者の心理を読む松下の心の声が観客の想像力を刺激する。補完する舞台美術。玄関ホールの情景を想像しつつ、つい松下の表情に見入っているうちに、暇をつぶしているようにしか見えなかった賀来の中には演劇への熱い思いがあり、松下には自分が交換可能だった部活動への苦い思いがあることに気がつき、心が動かされる。　**⑦福島県立ふたば未来学園高等学校『Indrah ～カズコになろうよ～』**舞台から唐突に、声が心に飛び込んでくることがある。ストーリーとも意味とも感情とも関係なく、声そのものに心が動かされる瞬間。新菜が「私の妹もいます」と鳴菜を紹介したとき、その声にグッと胸を突かれた。何か切実な真実の思いを抱いて今ここに立っているという印象が、他の一人一人にも重なってゆく。インドラの帰国、引っ越し、卒部。喪失感とその予感。それゆえに結びつきを愛おしむ思いが、舞台から客席へと溢れてきた。　**⑧逗子開成高等学校『ケチャップ・オブ・ザ・デッド』**噛まれたことに気づかずに鏡を見ると、そこにゾンビが映っているという場面が、ゾンビ物によくある。「祥太」という名は、ゾンビの噛み傷だ。達者な演技、演出、練られた脚本。自殺の話題が出ても、失速せず笑いが加速してゆく。さんざん笑っていた観客が、自分が何を見て笑っていたのかに気がついたとき、ゾッとして我に返る。ゾンビが祥太に見えたとき、この作品は毒のあるものに変わる。どこまでもゾンビ物のお約束を裏切らない。　**⑨埼玉県立新座柳瀬高等学校『Ernest!?』**女性が男性を演じているが、無理に男声を作って演じていないところが、却って違和感なく舞台に入り込める。衒うことなく、観客を楽しませることを第一に考え、そのこと自体をみんなが楽しんでいる。だからこそ、やや誇張された演技でも、観客は素直に受け入れる。名前に対するこだわりは日本人には分かりにくいが、それを音の印象の違いとして感覚的に分かりやすく伝えてくれる。観客の視点を重視した芝居作りは好感が持てる。　**⑩岐阜県立長良高等学校『My Name! ～The importance of Being Earnest～』**品格すら感じさせるセンスの良い書割が、初めから「作り話ですよ」ということを観客に教えてくれる。さらに、可動式にして場面転換を見せることで、演劇の楽しみの一つを見せてくれた。何より転換している使用人たちの表情が楽しげで、見ているこちらも笑顔になる。演出の上手さや発想の秀逸さを誇る意識がつい漏れてしまう舞台がなかったわけではない中で、この舞台からは、純粋な観客へのおもてなし感が伝わってきた。　**⑪日本大学鶴ヶ丘高等学校『屋上の話』**装置が良い効果を生む一方で、何も無いからこそ締まる舞台もある。演劇は

不思議だ。幕開き、観客の視線が三田に集中する。心地よい緊張感。何もしゃべらない。しかし、魅入ってしまう。遺書を靴の下に置くことをためらう。彼女がまだどこかで「生」側との繋がりを捨ててはいないことが感じ取れる。秀逸な数分間だった。バカバカしさとシリアスのバランス、ネタばらしのタイミング。それらがもう少し違っていたら…。演劇は難しい。　**⑫香川県立丸亀高等学校『馬鹿も休み休みYEAH!!』**容貌、嗜好、成績。表面だけを見て憧れたり、蔑んだりするのは、泰平たちも女子たちも同じだ。学問研究は、オトヒメで隠されていた面をも暴くが、だからこそ裏にも興味関心が向けられる。ねねを応援することで生きる実感を得ようとする泰平だが、その泰平が数学を頑張って理解しようとすることが、逆にねねを励ます。「誰かのため」ではなく、「自分のため」が誰かを励ますというふうに構図が逆転していくところが、強く心に響く。

春フェスのおかげで、より多くの優れた舞台に触れられる機会が増えたが、その影響が実を結んできたのだろうか。全国大会もずいぶん多様になってきたなあというのが、今年の印象。多彩な才能に圧倒される一方で、いくつかの舞台で惜しまれたのが、主人公と対峙する側の人物造形がステレオタイプだったり、登場人物たち価値観が一元的になってしまっていたことだ。登場人物たちが様々な価値観を抱いていたり、一人の人間の中にも矛盾や葛藤といった多面性があった方が、観る者に深い共感を抱かせられるのではないだろうか。

（北海道帯広柏葉高等学校演劇部顧問）

12本を振り返って

小池　豊

青春の貴重な時間と精神力と労力と費用を１年間注ぎ込んで創った12本。最高でした。この素晴らしい大会に関われた誇りを胸に、以下私見を書きます。

栃木県立小山城南高等学校『無空の望』

ヒナタを短髪にして性同一性に物語を絞るのではなく、「そんな単純なものではない」という提起。志が高く勇敢です。性別や恋愛対象を超え、そのままの自分＝実存に到達しそうな力作でした。例えばオタクの「別に普通じゃない？」など一部を真剣に言わせたり、母親や先生も自分でいられず苦しんでいると判る一言を入れるなどすれば、［高校生＝被害者］という図式に収まらない深みが出せたかもしれません。

大谷高等学校『ふじんど』

何しろ顔が最高。役者の解放度は出場校中随一で、多彩な表情が、武藤の抑制を際立たせていました。台詞をもっと相手に言えば、更に良くなったと思います。突飛に感じられそうな机椅子のメタファーも、卒業＝廃棄ではないにしても「もう戻れない」というイメージが重なり、成功していました。客席から現れた先生もインパクト大。Superflyの曲に乗ったイエー！は、嫉妬してしまうほど魅力的でした。

島根県立横田高等学校『雨はワタシの背中を押す』

抜けを生かした空間、繊細な照明、パステル色のカーディガン、外連味無い演技などが相まって、独特のカラーを創りあげていました。その美しも冷たい雰囲気が、「気がついたらここにいた」＝人生の不条理とマッチ。素晴らしい。ななが主体性を確立するラストも良かったけれど、「〇〇だからこうなった」という因果をもう少し納得していたかったです。その方が、あの疾走により深く感動できたと思うのです。

鹿児島県立屋久島高等学校『ジョン・デンバーへの手紙』

熱意が世界的歌手を動かし映画が完成する物語を、単なる美談にしなかったのが秀逸。反対派住民の「木を切るから撮影に来い」というシーン一つで、とても沢山のことが伝わってきます。「未来の子供たち」という台詞は真実味があり感涙しました。取材等も含め、制作過程で作り手が得たものが凝縮していたからでしょう。観客のイメージは屋久島を超え、世界・未来・消費社会への警鐘などへ広がり深まっていきました。永く語り継がれる名舞台だと思います。

佐賀県立佐賀東高等学校『君がはじめて泣いた日も、世界は普通の顔をした。』

工夫満載の幕開けで一気に引き込まれました。熱演に加え歌や身体表現も素敵。物言わぬ胎児を「命」と捉え、難題に精一杯取り組んだ価値は決して減じません。心から拍手です。もし問い直すなら‥‥自分は昔劇作家に「題材にした人が最前列で観ていても上演に耐えるか」と問われハッとしました。あの会場にも堕胎した女性やその家族がいたと思うと…といった論議も果敢な舞台化があってこそ。立派です。

帯広北高等学校『放課後談話』

舞台美術を背景とベンチだけにしたことで、二人の人物にフォーカスが集中。役者の素朴さが淡々とした会話劇とマッチし、雰囲気を醸し出していました。脚本も演技も隙間が多く、挨拶、化粧、リア充などの「談話」と松下の心の変化＝「演劇部をやる気に」には、明確な因果関係はありません。が、50分の積み重ねで青春のモヤモヤが心に堆積し、ラストは感動しました。観客の想像力が隙間を埋めたわけです。

福島県立ふたば未来学園高等学校『Indrah～カズコになろうよ～』

震災の影響を前面に出し過ぎなかったことで、か

えって表現が深まったと思います。青春群像に通底する心の痛みや関係の歪みが観客の内面で醸成されました。コラージュ的構造なので、各挿話の１回目はピンとこないのですが、２～３回目は沁みました。陽・歩未・明など役者はみんな個性が生きてリアル。訛りも魅力的。モノローグも相手に言っていて良かったです。観客席から太平洋と雪が確かに見えました。

逗子開成高等学校『ケチャップ・オブ・ザ・デッド』

あれだけ観客が笑ったのは「本物のやりとり」ができていたからこそ。脚本以上のSOMETHINGに溢れ最高でした。ゾンビという虚構性の高い題材でも、「あ→何だよ→死亡フラグ」など、［驚き→台詞］のディテイルがリアルなので、観客の無意識を動かせました。石など美術面のチープさも質感が統一され、低予算映画と重なり奏功。ゾンビ＝廃人の暗示や、映画によって存在が許される＝演劇や演劇部員と重なるなど、テーマ性も腹に残る名作でした。

埼玉県立新座柳瀬高等学校『Ernest!?』

質の高い舞台美術や衣装が観客を劇世界に誘いました。BGMや照明変化を減らしたことで、観客は物語に集中できたと思います。一幕で演じきれる脚本構造も秀逸。しかも、嘘がばれてから真実が明らかになるまでの加速感が素晴らしく、それを実現したテンポの良い演技は、まさに練習のたまもの。観客を楽しませる姿勢を立派に貫きましたが、「本物のやりとり」はその「楽しませる」をも高めると思います。

岐阜県立長良高等学校『My Name!
～The Importance of Being Earnest～』

白基調の明るい舞台に惹かれました。センス良く形象化された舞台装置。転換も鮮やか。逞しい女性と狼狽する男性という図式が明快に表現され、本筋に絡まないメイドなどの演出も丁寧でした。会話を「リアルを基にデフォルメ」すれば、戯曲の面白さを更に引き出せたと思います。役者・裏方の総体で生み出した明るい雰囲気が「人生捨てたもんじゃない」的メッセージと共に、爽やかな後味を残しました。

日本大学鶴ヶ丘高等学校『屋上の話』

脚本も面白いのですが、ロシア文学やパラオなど脚本以上に面白く、稽古場で楽しく創った日々が想われます。物語は、「急ごしらえで必死にやった」設定の方が、ネタの破天荒と辻褄が合い、自殺の扱いも軽くならなかったと思います。三田が死ぬことすらバカバカしくなっていく繊細な変化や、死なせないための「一緒に死のうね」には涙しました。審査で４つめの〇と大変迷った芝居でした。

香川県立丸亀高等学校『馬鹿も休み休みYEAH!!』

アイドルという優れた切り口から、現代社会の断面が見えました。部員一丸となってこそのパワフルな舞台で、オタ芸転換や単語帳投入など、実際に効果のある表現が満載。役者は文字通り「役割」を全うし、個性際立っていました。終盤のオタ芸が、アイドルという拠り所無しでは生きられない幾千万のオタクたちの「熱」を体現しているようで、胸に響きました。普遍的テーマに迫れていたと思います。

（埼玉県立秩父農工科学高等学校演劇部顧問）

胸を打たれた

谷口　克朗

３日間で12本の舞台を見せていただいた。いずれの作品にもどこかしら胸を打つものがあった。大会運営に走り回る生徒諸君・先生方および関係者のみなさんの姿にも胸が熱くなった。やっぱり演劇はひとりではできないのだ。今思い出しながらも胸にこみ上げてくるものを感じる、そんな３日間だった。ありがとうございました。

栃木県立小山城南高等学校『無空の望』

たとえば「オトコ」や「オンナ」といったレッテルでものを見たがる社会のあり方に苦しみ、そこから抜け出そうともがく人たちを描こうとした真摯な態度に敬意を表したい。ラストの「自分を隠さず強く生きていきたい」という台詞はストレートに人の心に響く。ただ、人をその人そのものの個性で見るべきだ、と考えるなら、登場人物たちを、ある種の類型ではなく個別の人格を持った人間として描くべきではなかったか。

大谷高等学校『ふじんど』

生物・無機物を問わずすべてのものに魂が宿るとする考え方、アニミズム。そんなことを考えながら見た。机、イス、日本は言霊の国だから「藤」という文字もイノチを持って動き出す。このような発想、というかイメージの連鎖から演劇を発想するという自由さにアタマを叩かれた。身体表現やスタッフワークも一糸乱れずの素晴らしさだった。緩急、強弱、余白の美、があればより彼女たちの魅力を肌で感じられたと思った。

島根県立横田高等学校『雨はワタシの背中を押す』

「だれかの背中を押す人になりたい」というメッセージが胸に突き刺さる。自分は自分の人生をただ自分のためだけに漫然と消費してきたのではなかったか、誰かのために自分ができることは何か、ということを考えさせられた。演技も素直で誠実さを感じさせられる舞台だった。ただ、人が生きる意味を考え、成長していくきっかけとしての「雨」（災害）という設定が、物語の構造のなかでじゅうぶんつながっていないのではないかと感じた。

鹿児島県立屋久島高等学校「ジョン・デンバーへの手紙」

この学校がこの作品を上演する「根拠」が確かに感じられた。おそらくは主人公のモデルとなった人物やその関係者に直接会って話を聞いたであろうし、何より物語の舞台となるのは自分たちが生きる屋久島の自然であり、登場するのは有名無名の自分たちの祖先たちである。彼らが歴史の中でどのように力強く生きたのか、屋久島の自然がどのようにして今あるかたちで残されたのか。出演者・スタッフたちはそれらを自分のこととして感じながら学び、考え、この舞台を作ったのであろう。それがこの劇に圧倒的な力強さを与えている。しかも屋久島で起こったことがこの島だけの問題ではなく、日本の津々浦々で、そして世界のいたるところで起こり、今もなお起こり続ける、私たち自身の問題であるということまで想起させ、胸を打つ。傑作である。

佐賀県立佐賀東高等学校『君がはじめて泣いた日も、世界は普通の顔をした。』

いのちの重さ、大切さについて、おそらく自分たちで何度も考え、話し合いながら作ったであろうと想像される。その誠実な姿勢に敬意を表する。ただ、性やいのちの問題は、きわめてプライベートなことであり、同時に非常に社会的なことでもある。だからさまざまな立場からさまざまな考えが生まれる。その中で唯一の「正解」を求めようとする性急さがやや気になった。意見の分かれるところだが、問題提起まででよかったのではないか。

帯広北高等学校『放課後談話』

この作品の脚本には、「結果」だけが書かれていて「理由」はほとんど書かれていない。だから俳優はセリフとして書かれていない余白の部分を、想像（創造）しながら「舞台を生きる」ことが求められる。実に手ごわい脚本である。その分、役者としてはやりがいのある作品だ。二人の俳優はこの作品を丁寧に演じ大健闘した。この先、稽古を重ねて、それぞれの役をほんとうに「生きる」ことができたら、より素晴らしい舞台が生まれるはずだ。

逗子開成高等学校『ケチャップ・オブ・ザ・デッド』

俳優たちは、ほぼ同年代の若者（大学生）を過剰にコミカルになることなく、自然体で演じていて、リアリティを感じさせた。自然に演じるというのは、実はとても難しいことである。自分をこの世に無用の者として自殺し、生き返ったゾンビもまた、人間としての奇妙なリアリティがあった（生きたゾンビをナマで見たことはまだないが）。そのゾンビが、この世に居場所がないのだから殺してくれと哀願する場面や、彼の吐く言葉が大学生たちには恐ろしげな呻き声にしか聴こえないという設定は、この劇が喜劇であると同時に実は現代社会の悲劇的な側面（疎外、孤独などの問題）を描いたものであることをよく表していた。これも傑作。

福島県立ふたば未来学園高等学校『Indrar～カズコになろうよ』

不在のインドラをめぐって、登場人物ひとりひとりが背負ったドラマの喜怒哀楽が、コラージュされたドキュメンタリーのように演じられる。語られる言葉にはそれぞれリアリティが感じられ、よく胸に届いてきた。はじめ自分たちは別々の場所からやってきたが、そして今もばらばらに生きているのだが、もしかしたらある瞬間だけは「カズコ（家族）」でいられるかもしれない。そんなメッセージがラストの実に美しい雪合戦のシーンから伝わってきた。

埼玉県立新座柳瀬高等学校『Ernest!?』

開幕から、よく作り込まれた舞台装置、舞台衣裳に驚かされた。演技も一定のスタイルで統一されており、男装劇であるという違和感をさほど感じさせなかった。何よりこの劇が大好きだという作品への愛が強く感じられた。ただ全体で90ページという長さを60分で演じるために、実際に心で感じて動き、話すという基本的な部分が、ややおろそかになったのではないかと感じられた。

岐阜県立長良高等学校『My Name!～The Importance of Being Earnest～』

各場面ごとの舞台美術は、驚くほどていねいに、統一された美しいデザインで作り込まれており、スタッフワークの素晴らしさに脱帽した。俳優もこの作品の喜劇としての側面をより意識して、自分たちも楽しみながら演じていた。ただ、この喜劇は本来すれちがいから生まれるの面白さが魅力であり、その意味では役者の演じ方についてもう一度考える必要があったのではないだろうか。

日本大学鶴ヶ丘高等学校『屋上の話』

開幕冒頭から数分間におよぶ沈黙のシーン、この何もない屋上の空間でどのようなドラマが起きるのか、期待に胸を膨らませた。しかし、劇の中盤ではドラマが動かなかった。自殺を考える主人公の三田の心の動きをドラマの軸にしたほうが、物語の構造がはっきりしたのではないだろうか。震災を経験し今も苦しむ人物が抱える深刻さと、演劇部が劇で自殺者を救うという設定のリアリティの希薄さが、あまりにかけ離れていると感じられた。

香川県立丸亀高等学校「馬鹿も休み休みYEAH!!」

進学校の中で女子たちから虐げられ少数派として生きる「オタク」男子たちの姿と、「ぼっち」を逃れるためにアイドルを演じる少女ねねの屈折を戯画化して描いた作品。と書けば深刻な印象を受けるが実際の舞台はスピード感のある演技と、炸裂するギャグの連続で会場は沸きに沸いた。「東大Ａ判定」とか「アイドル」とか、目に見える「価値」ばかり追い求める競争社会の中で、「きみがいたから頑張れた」と訴えるオタク少年泰平の純情が光る。できれば、これがあらゆる学校、あらゆる社会の縮図なのだと感じられたら、より感銘は深かったはずだ。

（和歌山県立串本古座高等学校演劇部顧問）

第１分科会 演　技
「感覚を使い、感覚に訴えかけることができる演劇は、これからの人生に必ず生きてきます」

講師　西垣　耕造

演劇のワークショップは、大ホールの客席と舞台を利用して生徒約190名が参加して行われた。

●「Play is Play=演劇（play）は遊び（play）、祈り（pray）」

「演劇にはこんなことができるんだ、こんなにいいものだということを今日は持って帰って」――先生ご自身が体験したアメリカの医療現場での演劇が果たす社会的役割の講話を聞き、生徒たちの中で演劇の可能性が広がった様子がその表情に見えた。二人一組になってのジャンケンでその場に出なかった手を言葉や体で瞬時に表現するゲームでは、「自分の芝居ばかりを主張せず、相手を受け止めよう」「見えないものをみつけて声と身体で表現することが演劇につながります」ということを実感した。

●「反応（リアクション）が行動（アクション）を生むことに演劇の可能性がある」

「日常の生活では行動が反応を生むが、演劇にはそこが逆転する面白さがあります」――ボールを使わないキャッチボールでは、生徒が“投げた”ボールの勢いや投げた者のアクションの性質を、受け取る西垣先生のリアクションによって“豪速球”にも“山なり”の送球にもなる演技を目の当たりにして、生徒たちは反応が演技を支えることを学んだ。「演劇にはテレビのようなアップで表情を見ることがないからこそ、リアクションが大切で、そこは科学技術がどんなに進歩しても演劇がなくならない理由です」との言葉には、私たちが演劇に取り組む勇気をいただいた。

●「息と身体の方向が演技を決める」

「船で旅立つ友を見送るために丘の上に駆け上がり、手を大きく挙げて振って見送り、やがて手をおろしてその場を去る。手を挙げる前後で息を吸う、吐くを入れ替えるだけで印象が違うよね」――先生の模範演技に見入った後は、「なんでだよ！」という単純なセリフを“押し出す”か“引っ張られる”ように言うか、全員で実演した。自分の身体を意志と連動して自在に動かす難しさを知った後は、「人間の重心の位置は人によって少し違うけど、役者は常に自分のニュートラルな状態を意識しよう」と、肩の開きが適切か、背骨をまっすぐにしているかなどを２人１組で棒を用いてチェックしあった。

●「自分と異なる行動や相手の人物を受け入れよう」

「向かい合って立つ相手の方に体を倒しながら手を伸ばす、その時にぎりぎり届くか届かない距離が自分と他人とが関わることができる精神的な距離です」―演劇で重要な心理と身体の距離の関係を掴んでから、２人１組で150センチの棒の端を指１本で支えて、落とさないようにしてできるだけ近づく遊びを行った。「棒を落とさないためには自分がしっかり支えるだけでなく、相手の動きをよく見よう」、６人で円形に６本の棒を支えて中心に集まる遊びでも、「他人を見ながら、自分自身と６人全員で面白いポーズを生んでみよう」として、生徒たちが協力して隊形を予測不能に変化させていく“絵”が既に演劇的であり、日常の稽古から部員がお互いのことを観察して協力しながら、舞台を作っていくことの大切さを学ぶことができた。

（文責　熊本県立大津高等学校 髙原　良明）

第２分科会 演　出
「演劇って？ ～同空間でのコミュニケーションとは～」

講師　鐘下　辰男

「演劇とは何だ？」約70名の参加者が集まった中、講師はこのようなことを問いかけた。「自分以外はすべて他者である。他者とは自分とは違う人間である。演劇とは自分が他者に対して何かを発信することである」と講師は説明していく。「発信を受けて他者は変化し、同時に自分も変化する、これが演劇である。つまり日常にも演劇があり、知らずに我々は演劇をやっている。その変化を大きく表現することが『演劇』で

ある。そしてそれが多く起こる場所が『劇場』である」という説明に、参加者は大いに納得していた。

コミュニケーションについて、現代の我々はスマートフォンを重要なツールとして使用している。しかし、演劇ではそれをコミュニケーションとは呼ばない、と講師は説明する。演劇において他者とコミュニケーションをとるためには、ある条件が必要である。それは自分と他者が同空間に存在することであり、同空間にこだわることが演劇である。そしてドラマを構成する「人間」の専門家であることが我々に求められる、と講師は言う。「なぜ演劇は同空間にこだわるの？」という問いを提示した後、それを理解するため次のような実験を行った。

一定の距離をとった 2 人。そのうちの 1 人が相手に近づいて行く。近づけるギリギリのところまで歩く。その近づいて行く最中に自分の「身体」が何回「変わった」と感じるか？

講師は最低 2 回「変わる」と話した。また近づく人が変われば、と感じる回数も場所も変わるということだった。そして、ここで重要だったのは、多くの人間はお互いに近づくと「笑う」ことだ。それはなぜか？

面白いから笑うのか？　ある「気持ち」を起点に「笑う」という行為になるのではない、気がついたら「笑って」いたのではないか？　行為に対して解釈（気持ち）を求めるが、それはあとづけではないか？「身体」にとって他者がパーソナルスペースを破る時、人間はきつさを分散させるために「笑う」。それは「無意識」の行動である。「身体」が先に反応し、その後「思考」「感情」がやってくる。それは無意識の行動であり、同空間で行う演劇だと「身体性」が介在する。

画面越しに接するものに対しては「感度」が下がる。同空間で存在する演劇では「感度」が上がる。舞台俳優はその感度を高めるために、ダンスや日本舞踊など様々なものに触れるべきである。演劇は「身体性」が豊かになり、その結果「感度」「想像力」が豊かになる。同空間にこだわるジャンルに携わる人間として、より多くの人間と接し感度を高められるようにしていくよう講師からエールを贈られた。多くの学びを得た講習会であった。

（文責　福岡県立ひびき高等学校 小原　雅之）

第 3 分科会　演劇評論　「観る」「考える」「伝える」そして「記録する」

講師　山口　宏子

第 3 分科会「演劇評論」の講習会は、山口宏子氏を講師に迎えて、会場の机と椅子の配置をくずし、車座になるところからスタートした。

山口氏はまず、今回の全国大会で劇作家、演出家、舞台美術家、俳優といったプロの作り手とともに、評論家である自身が講師である意味について参加者に問いかけた。演劇は観客がいなければ成立しないので、直接ではないが観客も演劇を作っていると言える。ではその観客側にいる評論家の立ち位置はどういうものか。

評論家は「観る」「考える」「伝える」、そしてもうひとつ「記録する」という大きな役割を担う。いくらでも複製が可能な映像と違い、ある演劇作品を実際に観ることができる人数は数千人から多くても数万人。実際に観なかった同時代の人に、その作品がどういう状況で上演され、それを観客がどのように受け止めたかを伝える役割がある。そしてその記録は後世のためのものでもある。作品の評価は時代によって変わるので、評論家は劇を論評するとともに、未来から論評される立場でもある。

演劇を観るプロである評論家は、できるだけ演劇全体を

フラットに観る。仕事で観る以上、論じる際は否定からはいらず、フェアに書き残すことを心掛けている。評論は公的に発信するものなので、観なかった人に伝えるために、わかりやすい表現をしなければならない。そのためには言葉をよく知ること、適切な言葉を選ぶこと、客観的でわかりやすい発信をすることが大切で、常に辞書を引くことを習慣づけている。たとえば最近、あらゆる感想を「ヤバイ」の一言で片づけてしまう傾向があるが、言葉は厳密に選び、大切に扱わねばならない。「笑った」「泣いた」というのは単なる反応であって評価ではない。もう一歩踏み出して言葉を探していきたい。他人に誤解のないように伝える能力は、演劇に限らず21世紀を生きる力としても求められる。それを演劇によってトレーニングすることができるのだ。

高校演劇に接して感じることがある。高校生は自分たちの劇を作ることに一所懸命になり過ぎて、外側が見えていないのではないか。（野田秀樹氏、三谷幸喜氏、宮藤官九郎氏等の名前を挙げ）高校演劇部員が自分たちの分野を牽引しているトップランナーの活動を知らないことが多い。野球少年なら誰でも大リーグの大谷翔平選手を知っているのに、演劇に取り組む高校生は、自分たちが取り組んでいることの延長線上に広がる世界を意識していない。人間は想定したカラの大きさにしか成長することはできない。広い世界を知り、自分にとって大きな世界地図を作ってほしい。　（文責　鹿児島県津曲学園鹿児島高等学校 谷崎　淳子）

第４分科会　「技術は創造のためにある」

舞台技術創造報告

講師　堀尾幸男／土屋茂昭／長田佳代子／吉木　均／乳原一美／藤田赤目／村尾貴庸

第４分科会では、地元の演劇部顧問から寄せられた脚本を素材とし、照明・音響・大道具等の舞台技術について学ぶ講習を行った。60分の劇を10分程度に凝縮し、舞台技術の効果を確認する素材として使用されたのは、佐賀県立鳥栖商業高等学校の真子多恵教諭作「日だまりの兄妹～しょうが焼きを添えて～」である。本編には登場しない、主人公の知的障害を持つ妹を中心に、時にぎこちなくなりながらも、優しくあたたかく紡がれる人間関係を、鳥栖商業高等学校演劇部員を中心として描き出し、７月25日～29日の５日間で完成させた。

上演後、その中で使われた「八百屋舞台」と称される傾斜舞台を、劇場に備え付けの道具や設備と安価に入手できる素材を使って、生徒が実際に作っていく過程を追った。演者が激しく動いてもずれない、なおかつ全景を効果的に見せることができる工夫が施されている箇所を確認しながら、作中に登場する「虹」を七色の傘（パラソル）を使って表現したり、傾斜にすることで人物の力関係等を演出したりと、舞台技術と演出の効果を再確認した。

土屋氏を中心とした講師陣が、舞台の中に込められた様々な技術を一つひとつ解説していく中で、会の始まりに土屋氏が「技術は創造のためにある」と述べたことが徐々に浮き彫りになってきた。音響の講習では、「音」は使用するスピーカーを会場備え付けの大きなものにするのか、舞台上に小さなものを仕込むかで違ってくるし、それらを併せて使えばより多彩な表現が可能となることを教えていただいた。照明の講習では、台本の中に現れる時間の経過、発光塗料を点描した白い布を背景に吊したものにブラックライトを照射して星空を作る、ホタル等の動きのある光をどう表すかなど、手作りの装置を使って教えていただいた。

「舞台は表現することが大事。鳴かないホタルをどう鳴かすのか、考えて、表現してみる。それを楽しむこと」「目的をはっきりさせておけば、舞台を作ることは難しくない」脚本の中にある具現化したいものを、そうするために技術があるという実践が次々になされていった。舞台技術が充実することで、表現の幅はいくらでも広がるということを改めて認識できた。研修会終了後は、参加者がステージに上がって舞台装置を見学したり、または実際に触れたり、講師の方々に質問をしたり、傾斜舞台の解体を間近で見ることができたりと、終始楽しく和やかな雰囲気だった。　（文責　沖縄県立球陽高等学校 浜比嘉　律）

第５分科会　部活動
ミーティングの積み重ねが、よりよい部活運営につながる

講師　五十嵐英実/小池　豊/谷口克朗

どんな学校だって、初めから良好な人間関係が作られ、部の運営が上手くいく、なんてことはない。そこまでのチームになるためには、部員個々人の意識の高さと時間の共有が必要だ。今回の分科会では、よりよい部の運営のためには、ミーティングをいかに充実させるかが重要であることを再認識させられた。

【講師より】

谷口先生　「少人数のクラブ活動について～顧問と生徒の関わり方（顧問の関わり方）」

先生が生徒とともに創られた「扉はひらく」「幸と歩み」をもとに、少人数でのクラブ活動について語られた。先生が大切にしているのは「相手の話を聞きましょう、そこからしっかり感じましょう」ということ。「扉はひらく」は、友達をテーマに、人と人との心が触れ合う瞬間を、「幸と歩み」は摂食障害をめぐる思いから、自分自身の問題だけではないことを伝える作品。どちらも部員が抱える事情から顧問との話し合いによって生まれたものである。稽古の中で「同じ苦しみを味わっている人のために演じなさい」と言い続けた谷口先生。演劇を通して「その先にいる誰かのために演じなさい」という言葉が印象的。

五十嵐先生　「エチュードによる集団創作～演劇を通しての気付きについて」

エチュードの手法をとりながら、集団創作をされている五十嵐先生。その理由を「頭でつくりがちなところを、瞬間的に思ったことを描くことで、想定外なものが飛び出す」と語る。集団で創作を始める前に、①方向性を決める　②アイデアを集める　③アイデアを選り分ける　④プロットを立てる　という４つの手順を踏み、エチュードを繰り返しながら台本を起こしていく。すべての段階において、相手を受けること、常識や普遍の名の下で否定しないことが大切。そうすることで終着点は見えないが、出来上がったときは全員で作品を共有できている。作品のみならず、部の人間関係をも築きあげる劇作法。

小池先生　「新入部員勧誘の実践紹介と退部希望者との向き合い方」

秩父農工演劇部に代々伝わる「CATDマニュアル」。分科会参加者に32ページものマニュアルが配布された。（本来はもっと分厚いものだそう、おそるべし秩父農工）このマニュアル、部活をする心構えから日常活動まで細かく扱われており、「歴代の先輩たちが書き足すのでどんどん増えるんですよ」と小池先生は熱く語る。秩父農工がとりわけ力を入れていることは新入部員の勧誘。潜在部員（もし出会ったら演劇部で最高の青春を過ごすかもしれない人）を取りこぼさないためにも、勧誘ライブを通して「楽しさ」を伝える。退部者の対応も重要な一つ、退部希望が出たらミーティングを行い全員で共有する。退部者と残る生徒が向き合うことで「部に残る生徒の主体性を鍛える」という言葉に納得。

３名の先生方の話の後、参加者との質疑応答が行われた。「役者と裏方を決める時期は」「実体験を脚本化するのに本音で語るためには」「顧問と部員との関わり方は」等々、質問が出された。「ミーティングの積み重ね」が共通するキーワードであり…ああ、この字数では書き足りない。ここでは書ききれないが印象的な言葉や話はまだたくさんある。それだけ中身の濃い、充実した分科会となった。

（文責　大分県立大分豊府高等学校 中原　久典）

第６分科会　生徒講評委員会合評会
感動！思いの共有！！

担当　生徒講評委員会

生徒講評委員会は、同じ高校生の視点から高校生の上演する劇を真摯に受け止めることを目的とする。仲間たちと共に観劇し、劇を観終ってから討議し、劇に対する受け止め方や感じ方が違うことに気づくこともある。合評会は、講評委員、各上演校の生徒等、総勢80名近い大討論会であり、以下は、その概要である。

⑴　**栃木県立小山城南高等学校『無空の望』**

性別での偏見に悩まされる高校生たちを内面的、外面的双方から描くことにより、普通という言葉の定義を考えさせられ、自分らしく生きることが大切だと伝えてくれた作品だった。

⑵　**大谷高等学校『ふじんど』**

楽しさに終わりが来ることを恐れ、本気になれない高校生が今を全力で生きる事の大切さを学ぶ姿に、終わりの意味を考えさせられた作品だった。全力でのダンスに涙する講評委員もいた。

⑶　**島根県立横田高等学校『雨はワタシの背中を押す』**

災害やつらい生い立ちが描かれていた。成長し、一歩前へ進む姿を通し、これからの人生で一歩踏み出すことについて考えさせられた作品だった。

⑷　**鹿児島県立屋久島高等学校『ジョン・デンバーへの手紙』**

自然の大切さや故郷に対する愛についての話。実話を基にしており、何度も諦めず立ち上がる登場人物から、「人の強さ」を感じる作品であった。

⑸　**佐賀県立佐賀東高等学校『君がはじめて泣いた日も、世界は普通の顔をした。』**

世間から望まれない妊娠をしてしまった女子高校生が自分のお腹の子供と向き合う姿を観て、親と子の繋がりの強さを考えさせられた作品だった。色々なことを各々に考えさせてくれた。

⑹　**帯広北高等学校『放課後談話』**

時間も場所も変化しない２人芝居で物語が展開された「放課後談話」。他人のちょっとした言動を観察しては下らないことを喋り続ける２人の姿は、講評委員の中で「偶然向かいに座った男子高校生の会話って面白いなぁ」というようなリラックスした気持ちで見れた。

⑺　**福島県立ふたば未來学園高等学校『Indrah～カズコになろうよ～』**

ドキュメンタリーのようなリアルな作品。私たち自身も抱える家族の悩みを取り上げ、作品に引き込まれた。また、「震災」というテーマをリアルに描いていた。今、この瞬間を大切にすることの大切さが伝わってきた。

⑻　**逗子開成高等学校『ケチャップ・オブ・ザ・デッド』**

ゾンビが登場し、大いに楽しみましたが、自己中心的な考えは不快感を与えるだけではなく、いじめの加害者となることもあると思わされた作品だった。

⑼　**埼玉県立新座柳瀬高等学校『Ernest!?』**

昔の海外の恋愛模様は欲が混ざり合いながらも、気品と上品さがあった。ドラマチックな演出や仕草といった表現の豊かさが強く心に残った作品だった。

⑽　**岐阜県立長良高等学校『My Name!　～The Importance of Being Earnest～』**

日本の話ではないのに、現代の日本と通じるアレンジが施されており、好みや価値観の違いが差別を生むことがあると考えさせられた作品だった。

⑾　**日本大学鶴ヶ丘高等学校『屋上の話』**

被災された方と死というものに対する新しい考え方が生まれた。新しい価値観を与えてくれた作品だった。

演劇をする意味を私たち講評委員全員が考える60分の舞台でした。

⑿　**香川県立丸亀高等学校『馬鹿も休み休みYEAH!!』**

相手をイメージだけで見てしまうことは人を傷つけてしまう。相手を尊重して行動することの大切さを考えさせてくれた作品だった。外側の姿ではなく、その中にある内面まで見ることで、人を救うことが出来ると感じさせてくれた。

（文責　長崎県瓊浦高等学校　詫間 智之）

事務局通信

令和になり初めての全国大会が、九州の交通の要衝・鳥栖市の文化会館で行われました。その日程に合わせて、今年度第一回常任理事会・理事会が開催されました。

初めに、前年度の事業報告、会計報告、決算報告に続けて、今年度事業計画案等の協議が行われました。全国大会出場校打ち合わせ会については、今年度４月の第３土日に日程を移しましたが、大きな問題は生じなかったことから、次年度以降も同様の日程で調整を図ることといたします。佐賀大会については、九州ブロックのバックアップをいただきながら、準備が進められてきました。上演に向けて、いくつか問題が生じましたが、事前の調整を丁寧に対応してきたとの報告がありました。

次年度の高知大会については、上演会場およびパブリックビューイング会場の運用等、会場の制約をクリアしながら、準備を進めているという報告がありました。オリンピック期間と重なること、多くの部門が高知市内で開催されることから、移動手段、宿泊施設の確保が喫緊の課題といえます。なお、生徒講評委員会について、活動時間、講評の協議方法、委員会構成メンバーの規模等の見直しが行われます。今までの生徒講評活動における課題をふまえて、より有意義なものにしていくための動きです。この立場で参加した生徒が、自分の学校や都道府県での演劇活動にその経験を持ち帰り、多くの成果をあげてきたということもあります。今後もぜひ積極的に活動を支えていきたいと考えます。

春季全国大会は来年３月に新潟県新潟市のりゅーとぴあで実施されます。それ以降、北九州、大阪と続きます。神奈川大会で試行された映像配信についても、今後継続していく予定です。

その他、生徒の大会参加（全国高総文祭開催基準規程第10条に基づく演劇部門の基準）についての確認、「演劇部指導者届」の提出による嘱託コーチ等の大会参加資格取得手続きの流れの確認がありました。いずれも、過去の理事会で協議してきたものですが、改めて提示させていただきました。また、著作権関係では、インターネット上の音楽、映像等の使用に際しての注意が喚起されました。これらの確認事項は、今後、各都道府県で顧問の世代交代による入れ替わりが見込まれることから、毎年度機会をとらえて情報共有していきます。

今年度より、事務局長が阿部順氏から黒瀬貴之氏にバトンタッチされ、新体制となります。高校の演劇活動のさらなる発展に向けて、全国の皆さまのご支援をよろしくお願いいたします。

（事務局・三上　実）

2018年度　全国高等学校演劇協議会決算報告

＜一般会計＞

収入の部

大項目	小項目	予算額	決算額	摘　　要
基本収入	会費	2,100,000	2,087,000	1,000円×2087校分
その他の収入	活動報告広告	800,000	940,000	「活動報告集」広告掲載料
	寄付金	100,000	110,000	「演劇創造」広告掲載料等
	高文連より	289,040	289,040	高文連より活動補助・旅費
	利息	40	48	三井住友銀行
繰越金	前年度より	3,663,775	3,663,775	繰越金
民間支援	特別協賛金	3,000,000	3,000,000	東京工科大学　日本工学院
	協賛金	1,324,000	1,324,000	NHK・四国学院・桐朋芸術・金井大道具
合　　計		11,276,855	11,413,863	

支出の部

大項目	小項目	予算額	決算額	摘　　要
管理費	旅費・交通費	2,100,000	2,112,026	長野、豊橋、佐賀　諸会議旅費等
	役員派遣費	350,000	290,090	会長、事務局長旅費
	会議費	80,000	80,000	常任理事会費用
	通信費	170,000	190,739	切手・ファクス・送料・ＨＰ維持費等
	印刷費	100,000	34,020	名簿・賞状
	消耗品費	50,000	39,825	文具・封筒・印章等
	事務局維持費	70,000	70,000	事務局長行動費
	記録費	20,000	20,000	全国大会上演脚本
	雑費	30,000	21,687	謝礼・差入れ等
事業費	会誌発行	1,300,000	1,372,788	演劇創造138・139号・発送費
	ブロック連絡費	10,000	8,100	各ブロックへの振込費用
	活動報告集	900,000	926,640	活動報告
渉外費		50,000	78,600	弔慰金
大会運営費	ブロック大会	2,000,000	2,000,000	日本工学院ブロック補助(25万×８)
	全国大会	500,000	500,000	日本工学院支援(長野県・チラシ５万円含む)
	舞台技術講習会	400,000	203,837	舞台技術講習会補助
	春季研究大会	300,000	300,000	特別会計へ
予備費		2,846,855	0	
合　　計		11,276,855	8,248,352	

＜特別会計＞

収入の部

大項目	小項目	予算額	決算額	摘　　要
補助金	全国高文連	300,000	300,000	全国高文連活動補助費
	全国高演協	300,000	300,000	一般会計より
民間支援	協賛金	300,000	300,000	日本工学院支援金
	協賛金	400,000	400,000	多摩美術大学支援金
繰越金		645,263	645,263	前年度繰越金
合　　計		1,945,263	1,945,263	

支出の部

大項目	小項目	予算額	決算額	摘　　要
大会運営費	出場校補助	300,000	300,000	出場校運搬費補助(30,000×10校)
	運営費	1,000,000	1,000,000	消耗品・委託費・印刷費・旅費等
	予備費	645,263	0	
合　　計		1,945,263	1,300,000	

2019年度　全国高等学校演劇協議会予算

＜一般会計＞

収入の部

大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘　　要
基本収入	会費	2,087,000	2,100,000	1000円×2100校
その他の収入	活動報告広告	940,000	800,000	「活動報告集」広告費
	寄付金	110,000	100,000	「演劇創造」広告費
	高文連より	289,040	232,660	役員旅費・運営費
	利息	48	40	三井住友銀行
繰越金	前年度より	3,663,775	3,165,511	前年度繰越金
民間支援	協賛金	3,000,000	3,000,000	日本工学院
		1,324,000	1,324,000	四国学院・桐朋学園・ＮＨＫ・金井大道具
合　　計		11,413,863	10,722,211	

支出の部

大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘　　要
管理費	旅費・交通費	2,112,026	2,300,000	佐賀 新潟 高知 事務局会議旅費等
	役員派遣費	290,090	350,000	役員派遣
	会議費	80,000	80,000	臨時常任理事会開催費
	通信費	190,739	200,000	切手、送料、ファクス等
	印刷費	34,020	50,000	名簿、賞状、封筒等
	消耗品費	39,825	50,000	文具、コピー等
	事務局維持費	70,000	70,000	事務局長行動費、会議室代等
	記録費	20,000	20,000	脚本購入等
	雑費	21,687	30,000	謝礼等
事業費	会誌発行	1,372,788	1,300,000	演劇創造140・141号、発送費
	ブロック連絡費	8,100	10,000	各ブロックへの振込費用等
	活動報告発行	926,640	950,000	各都道府県活動報告集
渉外費	渉外費	78,600	50,000	全国大会関係・弔慰金
大会運営費	各ブロック大会	2,000,000	2,000,000	日本工学院支援金(各ブロック25万円)
	全国大会	500,000	500,000	日本工学院支援(佐賀県、チラシ５万円含)
	舞台技術講習会	203,837	300,000	舞台技術講習会補助
	春季全国大会	300,000	300,000	特別会計へ
予備費		3,165,511	2,162,211	
合　　計		11,413,863	10,722,211	

＜特別会計＞

収入の部

大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘　　要
補助金	全国高文連	300,000	300,000	春季全国大会運営補助費
	全国高演協	300,000	300,000	一般会計より
民間支援	協賛金	300,000	300,000	日本工学院支援金
		400,000	400,000	多摩美術大学支援金
繰越金		645,263	645,263	前年度繰越金
合　　計		1,945,263	1,945,263	

支出の部

大項目	小項目	前年度決算額	予算額	摘　　要
運営費	出場校補助	300,000	300,000	出場校運搬費補助
	運営費	1,000,000	1,000,000	消耗品・委託費・印刷費等
	予備費	645,263	645,263	
合　　計		1,945,263	1,945,263	

「お知らせ」

第65回佐賀大会を現地の先生や生徒のみなさまをはじめとするスタッフの尽力で無事に開催することができました。

大会と並行しておこなわれた理事会では、2018年度決算と2019年度予算案が審議され、可決承認されました。

私たちの日頃の活動を支えて下さっているのは、民間支援団体の皆様の協力があってのことです。特別協賛団体の東京工科大学 日本工学院をはじめ協賛団体の金井大道具、四国学院大学、桐朋学園芸術短期大学、多摩美術大学などの各支援団体様に心から感謝を申しあげます。

第14回春季全国高等学校演劇研究大会は、2020年３月20日（金）から22日（日）まで新潟県新潟市のりゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館でおこなわれる予定です。ぜひ、足をお運びください。なお、上演校や時間などの詳しい情報は、わかり次第、全国高等学校演劇協議会のホームページに情報を掲載していく予定です。